

## テレビ番組映像の歴史資料（史料）としての課題

終戦（戦後）70～80年の8月のNHK特番の分析から

水島久光

Issues Concerning Television Program Footage as Historical Materials  
Analysis of NHK's August Special Programs from the 70th to 80th Postwar Years

MIZUSHIMA Hisamitsu

### Abstract

Since 2005 (the 60th anniversary of the war's end), the author has researched television programs on the theme of war. Twenty years on, most of the survivors have passed away. Not only must memories be passed down, but a new approach is also needed to consider how to uphold the pledge of non-aggression enshrined in the Constitution of Japan. This paper explores the possibility of treating the list of war-related programs from NHK Special, recorded over the 11-year period from 2015 to 2025, as historical materials. In doing so, it seeks clues for a new approach.

### 0. はじめに

2025年——戦後（終戦から）80年のメモリアルを刻んだこの年は<sup>0</sup>、同時に昭和の始まりから100年を数え、また放送開始100年のアニバーサリーにもあたる。こうした重なりは、偶然以外の何ものでもないが、それらが我々に過去を振り返るチャンスを与えてくれる意義は小さくない。しかし、それぞれの節目において何が語られるかは、それ自体がまさに歴史性を帯びた言説として評価すべきものであり、フーコー的に言うならば、そこには「知」と「権力」が結びついた構造が見出される<sup>1</sup>。

例えば明治百年とこの「昭和100年」の空気感の違いは、（本稿の主題ではないが）機会が許されれば掘り下げてみたいところのものである。「明治百年記念式典」が天皇皇后臨席の一大イベントとして日本武道館で開催、全国に中継放送された（1968年10月23日）ことを始め、それに向かう多くの記念行事が実施され、全国に公園・施設が建築されたその社会的インパクトと比較すると、この一年の淡泊さは際立っている——そこには、さまざまな理由が考えられ

るが、当時にはポジ／ネガ両面で、終戦からまだ四半世紀も経ていない切実な距離感があったことを伺うことができよう<sup>2</sup>。

総じていうならば、この温度差には「歴史」なるものの語り方／受容の仕方（メタレベルの枠組み）の変化が映し出されていると見るべきだろう。「改元」「終戦」「新たなメディアの誕生」といった題目各々が過去を叙述するための TOPIC として関数化する、そうした「歴史意識」そのものの後退と言ってもいいかもしれない。歴史はかつてフランシス・フクヤマが唱えたようなかたちで「終わり」（「脱歴史」的なゴール）を迎えることはなかった。我々がいま見ている世界は、『アナル』の指導者たちの「歴史とは過去を対象とする科学である」（フェーブル 1995：174）というテーゼを裏切るような様相を呈している。

それは単にデジタル技術が我々の時制を乱しているからではない。決定論的な一方向性を排してみるならば、我々はフランソワ・アルトグがいう「歴史の体制」の交代をまずそこに見るべきであろう<sup>3</sup>。たとえばそれは、彼が言う「現在主義」——「永続する現在という同時代的経験」あるいは「すべては、もはや現在しかありえない」（アルトグ 2008：46）という感覚に象徴されるとするならば、その淡泊さも一つのレジーム（体制）として理解すべきだろうし、ガーダマーのように歴史に解釈学的実践の光をあてるならば（ガーダマー 1995：27-29）、そこには時間だけではなく、さまざまな認識を支える地平の変動を見るべきだろう。

我が国の「戦後（終戦）80年」は、そうした問題を考える重要な契機となったように思われる。その認識を出発点に、「昭和」「放送」のアニバーサリーとの交差関係とともに、耳目に触れることがらを手掛かりにして、我々の「歴史の体制」を読み取ることを、本稿では試みてみたい——それは体験者の記憶と語り依存し続け、忘却と風化を放任してきた、戦争の世紀（20世紀）への不作為と決別し、新たな向き合いのマニフェストを書くことを目指すものである。

## 1. 放送アーカイブの史料性

### 1-1 放送アーカイブと戦争、その歴史的評価

テレビ番組を歴史資料（史料）として扱うことに関しては、未だ学術的なコンセンサスが十分に得られているとはいえない。2003年の地上デジタル放送への移行開始と共に、NHKアーカイブスがデジタルアーカイブとして本格的なスタートを切ったが、それはあくまでシステム環境整備の道筋が立ったにすぎず、そこに集積される映像が史料としての役割を果たしうるかについては議論が追いついていなかった。そうした中で迎えた2005年の「終戦60年」、NHKはアーカイブスを充実させるパイロットプロジェクトとして「平和アーカイブス」を掲げ、特番や過去の映像の掘り起こしを行った。奇しくも「60年」の歳月は、20歳で終戦を迎えた世代が80歳を数え、戦争体験者が次々鬼籍に入り、記憶の風化・伝承への危機感を強く後押しするタイミングとなり、NHK民放を問わず、テレビは数多くの「証言」を集めた<sup>4</sup>。

そもそも「放送と戦争」は、一筋縄ではいかない関係のもとにある<sup>5</sup>。メディアは、時代を映す鏡としての記録媒体であるだけでなく、なによりもそれらが層をなす編成体——メッセージを介してその「時代」そのものの空気を生み出すイデオロギー装置たるべく機能していた。

それがデジタル技術によってアーカイブのかたちを成すということは、まちがいなく旧来の文献史学の史料論の手に余る状況となる。その意味で「放送」は、アルトグが謂うところの 20 世紀の「歴史の体制」の精神が「資本の論理」と同期し、時空間の拡張から今日の「現在主義」に向かうプロセスを、再帰的にジェネレートしてきた基盤であり、そして「戦争」はその中のコア・コンテンツであった<sup>6</sup>。

現在の NHK アーカイブスが重要なミッションとして掲げる「放送史を描くこと」(<https://www.nhk.or.jp/archives/housoushi/>)は、間接的に「戦争と昭和」の関係をなぞることでもある。終戦前の「放送」が総力戦の推進と、国民の精神的収奪のエンジンとなっていたさまは、多くの研究によって既に証明されているが<sup>7</sup>、そのバトンを逆手で受け取り生まれたテレビが、戦後の社会的コミュニケーションの構造転換において果たした役割に関して、(制度的かつ実践的に)「それ以前/以降」を分ける一線たりうるものか否かの掘り下げは、明らかに足りない。逆説的にそれは「放送アーカイブ」の資料（史料）価値が問われないうまに、放置されてきた年月を指し示しているともいえよう。

なによりも長きにわたり放送システムは、搭載されるコンテンツ（内容表現）たる番組を、記録としてよりも「いま・ここ」を、時空間を共にするオーディエンスに働きかけるメッセージとして扱い、自己言及的に意味の表出を重ねてきた（水島・西 2008：25）。そしてそれを堰き止める「アーカイブ」活動、すなわち番組の保存と活用に NHK が計画的に乗り出すのは、放送の歴史が始まってから随分経って——1980 年代になってからである。当初は「番組制作のための資料庫」すなわち映像の再利用を目的としたものに限られていた。しかも素材としては「時とともに変化し消えてしまう危険性のある生活や風俗、出来事」の記録に偏っており、映像による文化財収蔵に近い自意識に支えられていた<sup>8</sup>。

その点で言えば、デジタル化こそが番組の「記録性」の目覚めにきっかけを与えたということになる。当時はまだ「放送と通信の融合」は単なるバズワードに過ぎず、その実質が DX（デジタル・トランスフォーメーション）と DA（デジタル・アーカイブ）を介したメディア・コンテンツの「データ」化にあることに多くの人が気づいていなかった。実はこの「融合」が、放送と通信にとどまることなく、標準化を志向するメタデータ・スキーマを介して MLA（博物館、図書館、公文書館）各機関との接続を拓いたのである<sup>9</sup>。2010 年代後半以降、その情報基盤は DH（デジタル人文学）の扉を開くムーブメントの一端を担うに至る。それは、さらに広く謂うならば、フーコー的な意味での 19 世紀型の知のディシプリン自体の問い直しを提起している。ビッグデータを用いた統計的な処理によって知見を引き出そうとするデジタル・ヒストリーはその中心的分野である（水島 2016：41）。

しかし、こうしたダイナミックな知の地殻変動に比して、残念ながら我が国の「放送」は、未だその黎明期の「規範」の射程の中にある。放送法第一条（1950 年）で謳われた「表現の自由を確保する」「健全な民主主義の発達に資するようにする」といった目標は、もちろん今も揺らぐことはない。だが一方、そうした精神の基点たる「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないやうにする」という憲法前文の切実さが、支える経験の乏しさによって余所余所しく受け取られてしまう状況の深刻さは募るばかりだ。放送の歴史において特別の地位を占

める「戦争」の描き方は、今こそ問い返されるべき段階にきているのだ。

我が国が国際社会に復帰した（サンフランシスコ講和条約発効の）翌年（1953年）に、テレビははじめての電波を發し、それ以来NHKを筆頭に各放送局が公共性の理念のもと、数多の戦争に関する番組を送り出してきた。今やその実数を正確に把握すること自体が困難であるが、せめてデジタル化以降だけでも、「歴史資料（史料）」としての評価（あるいは批判）をもって接近する必要があるだろう。「終戦80年」は、その新たな展開のために素通りすることができない、重要な年に位置づけられる。

## 1-2 歴史学における「史料の拡大」のジレンマ

本題に入る前に、少しだけ「歴史学」側からのまなざしについて整理をしておくことにしたい。ラジオ放送が世界各国で産声を上げた1920年代、この学問分野は大きな転換点に差し掛かっていた。前世紀（19世紀）、国民国家体制の成立とともに「出来事」をクロノロジカルに列挙することを叙述形式として規範化してきた「実証主義的なナショナル・ヒストリー」への異議申し立ての動きが、学術誌の刊行（1929）を機にコミュニティに結実する——所謂「アナル学派」である。リュシアン・フェーブルとマルク・ブロックという二人の指導者のもと、「歴史」に「科学」としての「問い（と解釈）」が求められるようになると、歴史家の振舞いも国家の枠組みや公的な文献から自由になり、多様な社会的事象に目が開かれるようになり、資料（史料）の対象範囲も一気に広がっていく。

第二次大戦後は、『アナル』などに寄せられる「社会史」的論考が若い研究者たちを刺激し、1970年代をピークに、このコミュニティの内外を問わず（ギンズブルグらも含め）「新しい歴史学」を求める機運は熱を帯びてくる（バーク1996：5-29）<sup>10</sup>。しかし「正統」な規範の失効によって、「全体史」を求めた第一世代の指導者の理念に反して、対象の矮小化、細分化も目立つようになる。そしてついに1989年、第三世代の『アナル』は「危険な曲がり角＝批判的転回」という状況に警鐘を鳴らし、以降歴史学の改革のシンボルの座からは降りる（小田中2017：278）。その一方で、同時期に『メタ・ヒストリー』（1973）で注目を集めたヘイドン・ホワイトらによる歴史の詩学的叙述への注目、すなわち文学理論への接近が「社会史」に入れ替わるかたちで、歴史の方法論争の前面に表れるようになる<sup>11</sup>。

但し、そのことは叙述対象であることがらの事実性が、何によってどう担保されるのかという問題を置き去りにする——リチャード・J・エヴァンスはそれに対し、イタリアの古代史家アルナルド・モミリアーノを参照し、その提唱する原理（一次、二次…といった史料の階層性と、事実と表象＝解釈の分節可能性）から出発するべきと主張する（エヴァンス2022：175）<sup>12</sup>。ホワイトのように歴史学が「歴史と虚構との間には境はない」（ibid：185）と言い切ってしまうのは極論とはいえ<sup>13</sup>、確かにその境界は見えにくい（『望遠鏡を覗いてぼんやりと』しか見ることにはできない」（ibid：195））。しかし、とはいえ——「過去が基本的に史料を通してその真実の姿を表していることは確かである」（ibid：211）。だからこそ（これだけ「歴史学」の見直しが続く叫ばれてきたにもかかわらず）、史料批判こそが学問としての歴史学の核心にあるという理解は揺るがないのである。

そう考えると逆に、近年の歴史学の方法論争が「叙述」の側面に重きを置き、「史料」に関する議論が発展していないように見えるのはなぜなのだろう。既に述べたように『アナル』を始めとする「新しい歴史学」は、参照すべき史料対象を広げてきた。エヴァンスは言う——「歴史家は長年、そうした史料を巧みに扱ってきた。しかもラジオや映画、ビデオテープ、カムコーダー、コンピュータ印刷物、フォトコピー、マイクロフィルム、ファックス、エレクトロニクス・データベース、インターネット、そしてワールド・ワイド・ウェブ、こうしたあらゆるものが、たとえその多くが散逸する運命にあるとしても、後世の歴史家に新しい形態の原史料を提供するだろう」（ibid : 205）——しかし、どうやって。このいささか楽観的な列挙は、伝統的な文書を扱うのと「同種の史料批判」（ibid : 206）で可能だと言う。本当だろうか<sup>14</sup>。

肝心なことは、ここからの具体的な作業である——放送アーカイブ、あるいはそこに保存・蓄積される映像の史料性に話を戻そう。モミリアーノの歴史学の基盤論を踏まえるならば、テレビ番組は、その扱い方によって最低でも一次、二次…さらにはN次史料の間を位置づけが動くのである。それには歴史家の仕事であるべき「叙述」が関与する部分が多い。言語のみならず多様な記号素が重なって「番組」を成立させているからである。このあたりをきちんと腑分けしてメタ・データとして記録し、解釈を施す方法論が伴わない限り、放送アーカイブの史料性を謂うことは困難であろう——とりわけ「戦争」という主題が与えられたとき、その要素間の複雑さはまた飛躍的に高まる。だからこそそこは、対象そのものと方法論の重要性が交差するクリティカル・ポイントなのである。

## 2. 対象と作業仮説

### 2-1 対象の絞り込み

ともかく既存放送アーカイブに収録されているものだけでも、番組映像は膨大である。しかしそれは決して無秩序にバラバラと送り出されたのではない。編成というグリッド化された時空間枠を前提に制作され、その点でほかの映像コンテンツとは一線を画す「意味のネットワーク」が、あらかじめ刻印されたものとして存在している。

本稿ではその特性を、重要な与件として見なす。それを踏まえ、対象をNHK総合テレビで放送された「特別番組」の「初回放送」（再放送／アーカイブ放送ではないもの）に絞って、慎重に主題たる「戦争」に接近していく。NHKは、テレビ放送開始以来ドキュメンタリー制作に力を注ぎ、『日本の素顔』（1957-1964）から、『現代の映像』『ある人生』（1964-1971）『ドキュメンタリー』（1971-1978）に連なる定時枠を設けてきた。その後『NHK特集』（1976-1989）と後継の『NHKスペシャル』（1989-）が枠を引き継いだ。定時（毎週日曜 21:00）に限らず、大きな事件・出来事に即した特番のショルダータイトルとしても用いられ、ドキュメンタリーをメインとしつつも、ドラマや討論、実験的番組をも含む、様々な形式を横断する「大型特集番組枠」に位置づけられている<sup>15</sup>。

現在、同種の枠としては『ETV特集』『BS1スペシャル』などがあるが、総合テレビのゴールデン帯の放送という意味ではまさに「スペシャル」であり、制作者も公共メディアのシンボ

ルかつ放送文化のイノベーションの担い手の自意識をもってバトンをつないできた。その『NHK スペシャル』が最も定時を崩し、柔軟に編成される時期が 8 月である——それは戦争を「主題」とする番組を一気に放送するためだ。もちろん「8 月ジャーナリズム」(米倉 2021)と揶揄されるように、6 日、9 日の原爆忌、15 日の終戦記念日に合わせた編成は、歳時記化されてきた側面は否めないが、それだけに『NHK スペシャル』は、時代の変化を定点で敏感に察知する羅針盤の役割を果たしてきたという側面はある。

そうした『NHK スペシャル』が背負った特別な意味合いに注目し、本稿では戦後 70 年(2015 年)から 80 年(2025 年)までの 11 年間の 8 月に初回放送された計 68 本を対象に分析を試みる。それらには、いかなる観点から歴史資料(史料)として向き合うことが可能なのだろうか——その評価と条件はなにか。

そもそもテレビ番組には、アナログ時代に築かれた放送システムのプラグマティックな(ダイクシスなどの時空間に依存する)メタ記号が刻まれ、送り手-受け手間の交渉関係を支えてきた(水島・西 2008: 33)。しかしデジタル化以降、そのフレームはタイムシフトやマルチ・デバイス化によって裁断され、オンデマンドの配信プラットフォームの力学の影響下に引き込まれつつある(水島 2017: 232-237)。まさにこの転換が「放送アーカイブ」がこの先どのような役割を担いようかの試金石たるべき点なのだが、今のところ十分に検討されていない。

「戦争」というテーマが抱え込んだ、記憶と時制、そして国家の罪と向き合うべき主体の関係については、このような時空間に漂うメディアの多視点性を踏また上で考えねばならない問題である。結論を先取りするようだが、これまでどれだけ議論を重ねても、過去の戦争から続く報復の連鎖が断ち切れない「知の無力感からの脱却」の鍵は、この混沌の中にこそ見出されるべきなのだ。

## 2-2 作業仮説：戦後が戦前に切り替わるとき

2022 年 12 月 28 日、超長寿番組『徹子の部屋』(テレビ朝日)にゲスト出演したタモリの一言から、「新しい戦前」はちょっとしたバズワードとなった。実際、タモリも黒柳徹子もそれを熟慮して口にしたわけではない。しかし同年 2 月に勃発したウクライナ危機の衝撃も相俟って、この言葉は人々の心を揺さぶった<sup>16</sup>。

これまで「戦前」という言葉は、1941 年 12 月の太平洋戦争開戦以前の時代を指すことは自明であり、それ以外に用いられることはほぼなかった。しかしいざこういう形で改めて突きつけられると、そのボキャブラリーに解釈項を対応させようという意識(連続する記号過程)が作動しはじめる(水島 2004: 168-175)<sup>17</sup>——そしてもう一方で、これまた自明化されてきた「戦後××年」という表現の曖昧さと響きあい、我々は漠然とした不安に苛まれるようになる——本当に「戦後=戦争が終わった後の時代」を生きているのだろうか——と。

戦後 70 から 80 年にかけての十年間は、まさにこの「戦後」への疑いが広がる空気感とともにあった。そして『NHK スペシャル』の戦争関連番組群は、視聴者との向き合いにおいて敏感にそれを表現してきたということは言えよう。振り返れば、戦後 60 年までのメディアが書き起こした「戦争の記憶」は、桜井均が「モノローグ(独白)」と表現したように、戦争の時代を

生きた人々による自問の形式をとるものが支配的であった。それはそのまま戦後の「体験者」たちの間のコミュニケーションの断絶を表していた（桜井 2005：6）。兵士たちの眼に焼きつけられた凄惨な戦場は黙して語られず、銃後の生活は空襲や原爆などの理不尽かつ一方的な受難としてクリシェ化した。このような個人から家族、そしてせいぜい地域に封じ込められ、指し示された「あの戦争」は、「なぜ（こんなことが）」の問いに容易に答えが得られないもどかしさを「だから戦争はいけない」の結論で埋めるショートカットによって語りを定型化させ（水島 2020：83）、そこに戦争体験者が徐々に少なくなる不可避の現実を重ねていった。

しかしこうしたコミュニケーションの閉塞を打ち破ろうとする試みも地道に続けられてきた。そのきっかけは、「アジアの声」によって与えられた。1991年の元慰安婦（キム・ハクスン）の告白以降、多くのNHKのドキュメンタリー制作者たちはアジアに目を向け、埋もれた記憶に光を当てようとした。一方その流れに強引に蓋をしようとする反動も顕著化し、攻防戦の様相を呈すようになった<sup>18</sup>。その象徴たる出来事が所謂「ETV問題（『ETV2001：シリーズ 戦争をどう裁くか 第二回 問われる戦時性暴力』（2001年）に関する問題）」である。2005年に当該番組のディレクターの告発によって耳目を集めたこの事件は、皮肉にもメディアへの政治介入のリスクを膾炙する結果となった<sup>19</sup>。

この一連の動きは再びコミュニケーションの萎縮を生んだ。「戦争を知る者（体験者）」が「戦争を知らない者（戦後生まれ）」へ「いかに伝えるか（経験を社会的に共有するか）」という課題に逡巡するナイーブな心理がじわじわと浸透していったのである。そもそも学校教育も含め、「あの戦争」に関する十分な知識が与えられていない人々には<sup>20</sup>、加害性の認識はハードルが高すぎ、また刺激も強すぎたのである。特に「八月ジャーナリズム」は、原爆の悲惨さが導入役を担うだけに、その強烈な印象が「モノログへの回帰」を促す隙間の口を開ける<sup>21</sup>。

本稿で行う分析は、これらの要件（戦後60年以前の状況）が伏線となって、20年後の今日に「新しい戦前」を受け入れる／過剰に反応する意味の空白地を生んだことの検証でもある。桜井均は既に20年前に「アパシー（無関心）に道を譲り渡してしまったこと」「メディアの側も徐々に、言葉を『自閉』させる傾向にある」こと、その理由に様々な要因が「複雑に癒着し、言葉を失いかけている」ことを指摘している（桜井 2005：439）。この「癒着」を一枚一枚丁寧に剥がしていくこと——それが課題である。それは同時に、テレビ番組の「史料」としての扱い方（方法論）を見定めていくきっかけにもなるはずである。

### 2-3 比較対象：戦後60年（2005年）の8月はどうだったか

以下は、20年前（2005年＝戦後（終戦）60年）の8月の『NHKスペシャル』のラインナップである。見事なまでに（被爆、または終戦）「60年企画」が6日から連日並んでいる。ちなみに終戦の日の15日は『NHKスペシャル』の冠はないものの、特別企画番組が放送された——『日本の、これから』（17:00～18:20、19:30～21:30）という討論番組である。

表 1 2005 年（戦後 60 年）8 月（6～14 日）の『NHK スペシャル』

6 日	被爆 60 年企画被爆者命の記録～放射線と闘う人々の 60 年
7 日	終戦 60 年企画 ZONE・核と人間
8 日	終戦 60 年企画 追跡 核の闇市場～放置された巨大ネットワーク
9 日	被爆 60 年企画 赤い背中 ～原爆を背負い続けた 60 年～
10 日	終戦 60 年企画 コソボ・隣人たちの戦争“憎しみの通り”の 6 年
11 日	終戦 60 年企画 そして日本は焦土となった～都市爆撃の真実～
12 日	終戦 60 年関連企画 ドラマ「象列車がやってきた」
13 日	終戦 60 年企画 靖国神社 ～占領下の知られざる攻防～
14 日	終戦 60 年企画 戦後 60 年 靖国問題を考える

この大型討論番組には『戦後 60 年 じっくり話そう アジアの中の日本』という副題が添えられている。今日ならばおそらく『NHK スペシャル』として位置づけたであろうこの番組が、その枠外で放送されたことについて、まず考えてみたい。

実はこうした編成は、この 2005 年（戦後 60 年）だけでなく、翌（2006）年、翌々（2007）年まで続いたパターンであった。そして終戦の日（15 日）の『日本の、これから』のテーマにつなぐ内容の『NHK スペシャル』が前日に放送されている（2006 年「日中戦争」、2007 年「東京裁判～憲法 9 条」<sup>22</sup>）。しかし慣例化されるかと思われたこの流れは、2007 年限りとなった。2008 年は北京オリンピック中継のための特別編成だったが、2009 年以降、元に戻ることはなかった——いったいどのような番組を『NHK スペシャル』枠で放送するかは、その後の数々の事例を見ても、ガイドラインがあるようには見えない。がしかし『日本の、これから』が外れ、反対に今日では枠外にあるドラマが枠内で放送されていることを見ると、まずは『NHK スペシャル』が連日放送されることに編成的意味を見出していたのではないかと推測できる。

そうしてみると、6 日と 9 日の原爆忌を中心とした番組群も、被害者の受難的側面に閉じることなく、核問題に対する国際的な視野を開く意図が連なり<sup>23</sup>、さらにそこにコソボ問題、あるいは国内においても見落とされがちなローカルな都市空襲が加えるなど、戦争を語る話法の「ステレオタイプ」を破ることが狙いとされていたように映る。その上で 13 日に「靖国問題」が提起され、終戦の日にはそこを皮切りに「アジアと日本」の関係、そして「和解への道」を探る。流れには、明快なアジェンダの道筋を読み取ることができる。

これは『ETV2001:シリーズ 戦争をどう裁くか』で本来試みようとしたコンテクストのリベンジ・マッチであった。しかもそれをこの年は『NHK スペシャル』枠を用いて、もう一回り大きなスケールで組み立てようとした——これはある意味、テレビというナショナルなメディアを、社会的なコミュニケーションの場として設えようとした公共的実験であった。しかし、繰り返すがその目論見は、わずか三年で潰える<sup>24</sup>。

その後、戦後 70 年までの 8 月の『NHK スペシャル』がどのような紆余曲折を辿ったかについては正直詳らかに追えていないが、いくつか重要な番組も作られている<sup>25</sup>。しかし全体を

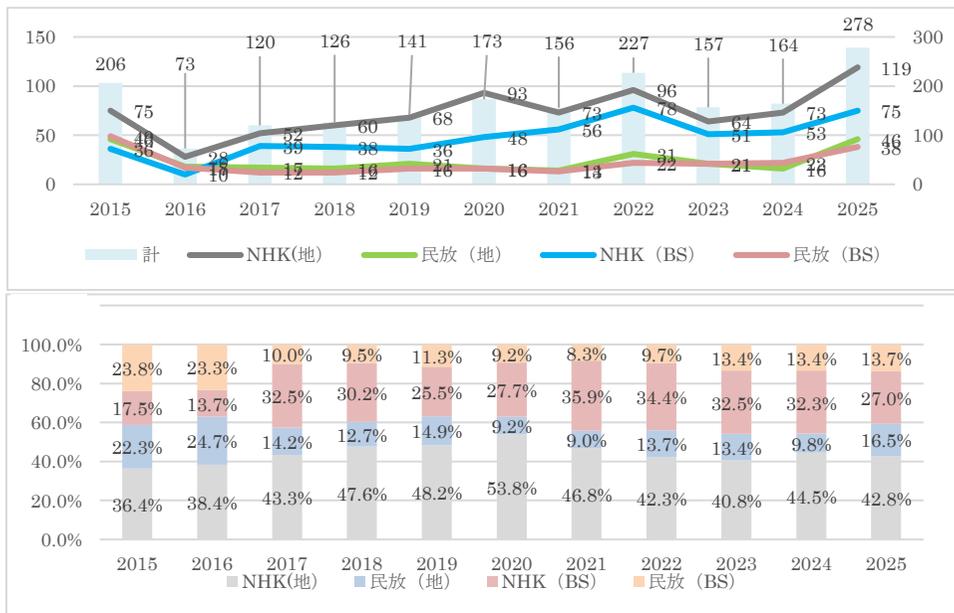
見ると 2011 年の東日本大震災、2012 年のロンドンオリンピックの影響もあり、2013 年を除いては一貫した展望をもって編成されたようには見えない（水島 2020：45-46）。そうした谷間の年月を経て、迎えた 2015 年（戦後 70 年）の 8 月の番組表には、ただ驚かされるばかりだった。なんと民放・BS も加えると 200 以上の番組（206 番組）が放送されたのである。最早、録画が追いつかない状況に、慌てて EPG（電子番組表）の紹介文だけでも保存しようと作業を開始した——そしてその作業は戦後 80 年までの 11 年続いた——以下本稿では、まずその資料をベースに、番組の「史料性」検証への一步を踏み出していくことにしたい。

### 3. 終戦 70～80 年（2015～25 年）の 8 月の『NHK スペシャル』

#### 3-1 この 11 年間の変化

既に述べたように、既存放送アーカイブに収録されている番組映像の情報量の大きさは、文字資料と比較しうるレベルにはない。だがテレビ番組は、編成という時空間のグリッドを介して送出されているだけに、メタ・データの秩序性は高く、意味形成に関わる外的要因も絞り込みやすい条件が揃っている。まずそこを切り口に、資料を整理しよう。

図 1 戦後 70～80（2015～25 年）の番組数とシェア



この 11 年間の作業では、初めに EPG（電子番組表）のタイトルならびに紹介文中に「戦争」「平和」および関連する単語（空襲、特攻、動員 etc.）を探し、そこから紹介テキストを収集した。但しニュース番組については、紹介文中に特集としての記載がないものは除外した。目視によるため若干の漏れはあるが、何度も見直しを行い、蓄積されたデータ数は NHK と民放（地上波と BS）を合わせ、1,800 件を数えるまでになった。

年によって若干の増減（10年単位のメモリアルイヤーの番組数は比較的多く、オリンピックイヤーは少なくなる傾向）はあるが、NHKが（地上波・BSを足し合わせると）全体の7～8割を占め、中でも『NHKスペシャル』は「8月編成」の中核を占める。2015～25年までの11年間に放送された68本は、放送日毎に表にしてみると、6日の広島原爆忌、15日の終戦の日には必ず放送されており、『NHKスペシャル』枠外の「特集・終戦ドラマ」、その他の特番（●）も含めば、月上半期はテレビを介して視聴者は毎日「戦争」と向き合うかたちとなっている。

表2 戦後70～80年の「戦争関連」題材の『NHKスペシャル』（■日曜=本来の放送枠）

	～	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	～	計
15			1	1	1	1	○	1		1		2	1						9
16			1	※	1					1	1	1					1		6
17			1						1	1	1	1					1		6
18		※	①					1	1	1		1				1			6
19		●	1		○			1	1			1			1				5
20	1		1			1						①	1						5
21					※	1				○	1	1							3
22			1	1	1	1		○		1	1	1					1		8
23		1	1	1	○					1	2	1					※		7
24			1					※				①	1	1	1				5
25			1			1	●			○		2	1	1	1			1	8
計	1	1	⑩	3	3	5	0	3	3	6	6	⑬	4	2	3	1	3	1	68

※:8月日曜の本来の枠で戦争題材の『NHKスペシャル』が放送されなかったケース

2016年8月7日 NHKスペシャル 大アマゾン 最後の秘境 第4集

2018年8月5日 NHKスペシャル 6男4女 サーカス家族の夏

2021年8月8日 東京オリンピック 閉会式(中継)

2023年8月21日 NHKスペシャル 混迷の世紀 第11回台頭する第三極

2024年8月11日 パリオリンピック2024 パリの「舞台に立って」SP

●:『NHKスペシャル』枠外の「戦争」特番

2019年8月5日 戦没者は二度死ぬ～遺骨と戦争 2025年8月10日 戦争をどう伝えていくか

○:枠外ドラマ ①:『NHKスペシャル』と枠外のドラマが同日に放送されたケース

それぞれの年にどのような番組が放送されたかについては、次節でサマリーしていくとして、総じて言えるのは、2005年（戦後60年）のような明確な編成意図（＝アジア諸国との和解）は無く、おおよそ6日～9日は原爆に、10日以降は終戦に寄せてはいても、番組相互の関係は乏しく、それぞれが異なる主題を掘り下げているように見えることだ。しかしだからと言って、必ずしもそれを散漫な編成と断じることはできない——逆にそこにこそ、テレビというメディ

アの「現在主義」性が印象づけられる。特定の出来事に焦点をあてた「新たな資料」の発見、「新たな証言」の収録、それらに基づく「新たな解釈」は、当該番組が制作されたのはあくまで「今年」であることを暗に強調し、戦時中（あるいは終戦直後）と「イマ」との時間的隔たりを消し去る。それは体験者が記憶主体として、歴史と人生との連続性を意識しつつ語る、その糸が切れかけていることを意味している<sup>25</sup>。

その微かな連続性があるからこそ、「戦後××年」の看板のもとにメモリアルのコノテーション（共示）の積み重ねが可能だったのだ<sup>26</sup>。「新しい戦前」のラベリングは、そのアクチュアルな距離感喪失のネガ（ラカンの言えば「失われた対象」を指し示す行為）ともいえる<sup>27</sup>。

### 3-2 戦後（終戦）70年から74年まで

さてこれから3節に分けて、2015（戦後70）年から2025（戦後80）年までの各年8月に放送された戦争に関する『NHKスペシャル』を挙げていこう。そしてその「現在主義」と「記憶の連続性」の関係（力学）が、いかに番組説明テキストに刻まれているかを見ていきたい。

各番組には以下の記号を付していく。

「新資料の入手・発掘・発見」：■

「新証言の収録」：□

「既存資料への別角度からのアプローチ・解釈」：◆

「ビッグデータに基づくデータ・ジャーナリズム的検証」：◇

「カラー化など新技術を用いた新たな表現」：◎

「以前取り上げた題材への追跡調査」：★

「終戦以降の題材または現在進行形のドキュメント取材」：☆

なおドラマ、討論、著名人によるルポについてはその旨記載する（コーパスとした各番組のEPG 紹介文については、文末附録に全件転載したので参照のこと）。

もちろん例えば「□」がつけられていなくても番組中には「証言」が用いられている場合がある。だが今回の調査・分析においては、あくまで EPG データ紹介文→映像への確認の流れを採った。すなわち「なぜ今年、この番組を制作したのか」その意味づけにおいて、それぞれの記号が表す事象がいかに強調されているかがポイントである<sup>28</sup>。

表3 戦後70（2015）年の戦争関連『NHKスペシャル』とその強調点

6日	きのご雲の下で何が起きていたのか	□◇◎
7日	戦争とプロパガンダ～アメリカの映像戦略～	◇□
8日	特攻～なぜ拡大したのか～	■□
9日	“あの子”を訪ねて～長崎・山里小 被爆児童の70年～	★
11日	アニメドキュメント「あの日、僕らは戦場で～少年兵の告白～」	■□◎
13日	私たちの太平洋戦争～従軍看護婦 激戦地の記録～	■□
15日	戦後70年 ニッポンの肖像 -戦後70年を越えて- 【討論】【ルポ】	☆

16日	“終戦”知られざる7日間	◆
-----	--------------	---

ほぼ連日NHKスペシャルや特番ドラマを放送し、15日に「国のありよう」を議論するという戦後60～62年の編成を踏襲しているように見えるが（但し、この年は討論も『NHKスペシャル』の枠内）、各番組の主題は様々。アニメや映像のカラー化など表現面で、視聴者の関心を喚起する試みが始まる。「従軍看護婦」は日本赤十字の情報公開を受けてのもの（同時期TBSもドラマとドキュメンタリーで追った題材）である<sup>29</sup>。

表4 戦後71（2016）年の戦争関連『NHKスペシャル』とその強調点

6日	決断なき原爆投下～米大統領 71年目の真実～	■□◆
8日	象徴天皇 模索の歳月	☆
13日	ある文民警察官の死～カンボジア PKO 23年目の告白～	□☆
14日	村人は満州へ送られた～“国策”71年目の真実～	■◆
15日	ふたりの贖罪（しょくざい）～日本とアメリカ・憎しみを越えて～	◆
20日	沖縄 空白の1年～“基地の島”はこうして生まれた～	■

原爆忌の番組は「71年目の真実」のタイトルで、10年単位のメモリアル後も歴史の不断の見直しが行われていることを強調。天皇がメディアを通じて退位を表明した影響が編成にも表れる<sup>30</sup>。また“70年”を過ぎ、「あの戦争」を直接言及するよりも、PKOを題材とするなど、戦後の「平和」維持体制がかならずしも平坦ではなかったことに光を当て、「現在」の課題として描く。リオデジャネイロオリンピックの中継も相俟って、極端に番組数が減少した。

表5 戦後72（2017）年の戦争関連『NHKスペシャル』とその強調点

6日	原爆死～ヒロシマ 72年目の真実～	■◇◎
12日	本土空襲 全記録	■◇◎
13日	731部隊の真実～エリート医学者と人体実験～	■◇
14日	樺太地上戦 終戦後7日間の悲劇	■□
15日	戦慄の記録 インパール	■□
20日	戦後ゼロ年 東京ブラックホール 1945-1946	■□◎

本数は多くないが、いくつもの番組が話題になった。資料（史料）に統計的解釈を施し、インフォグラフィックを用いて全貌を俯瞰／動態を可視化するデジタル・ヒストリーの手法が意識的に用いられるようになり、731部隊などの加害の事実、インパールや樺太など新たな資料の発掘に基づく埋もれた歴史への言及が相次ぐ。タイムスリップを設定に加えたドラマも制作されたが、「あの戦争」を実際に体験した世代との隔たりの自覚が顕れ、現代的感覚とのショートカットが求められるようになる<sup>31</sup>。

表6 戦後73（2018）年の戦争関連『NHKスペシャル』とその強調点

6日	広島 残された問い～被爆二世たちの戦後～	☆
----	----------------------	---

11日	祖父が見た戦場～ルソン島の戦い 20万人の最期～	◆【ルポ】
12日	“駅の子”の闘い～語り始めた戦争孤児～	□
13日	船乗りたちの戦争～海に消えた6万人の命～	■□◇
15日	ノモンハン 責任なき戦い	■◎
19日	届かなかった手紙 時をこえた郵便配達	■☆【ドラマ】

大人として戦時期に生きた人々の証言を得ることが難しくなる中、終戦から戦後期の子どもたちに焦点をあてる企画が出てくる。文書だけでなく戦後収録した音声データなどが新たな発掘資料に加わる。著名人の取材やドラマなど、「戦争の記憶を訪ねる人」を主役に立てる演出も用いられるようになった。このようなさまざまな手法は、戦争体験のない人が視聴者の大半を占めている現実を意識してのものと考えられる。

表7 戦後74（2019）年の戦争関連『NHKスペシャル』とその強調点

●5日	戦没者は二度死ぬ～遺骨と戦争～	☆
6日	“ヒロシマの声”がきこえますか～生まれ変わった原爆資料館～	☆
11日	激闘ガダルカナル 悲劇の指揮官	■◎【ドラマ】
12日	かくて“自由”は死せり～ある新聞と戦争への道～	■
15日	全貌 二・二六事件～最高機密文書で迫る～	■◎
18日	戦争と“幻のオリンピック” アスリート 知られざる闘い	◆【ルポ】

遺骨収集、原爆資料館リニューアルなど、発掘された過去の記録よりも、現在進行形の問題を取り上げたドキュメンタリーが目立つ<sup>32</sup>。新しい証言収集は難しくなる一方で、資料を掘り下げ太平洋戦争開戦前の動きを検証する番組がならんだ点に注目。また演出面では、ドラマや著名人による取材によって、「出来事」よりも「人」に光を当て共感を訴求する表現が目立つようになる。

### 3-3 戦後（終戦）75年から79年へ

証言を手がかりに番組をつくるのが徐々に難しくなり、新しい資料（史料）の発掘・発見にインパクトを求める一方、既存資料の新解釈などの動きを追い、新しい世代に向けたアプローチを意識して制作される番組が増えた。戦争は決して過去に止まり、変わらぬ教訓を繰り返すメッセージする出来事なのではなく、常に新しく書き換えられていくべき「歴史」とであるという姿勢が、番組にも映し出されるようになる。

そうした中で迎えた戦後75年は、戦禍の史実に向き合う緊張感が、東京オリンピックによってかき消されてしまうことが危惧された。しかし幸か不幸か、新型コロナウイルス感染症の流行でオリンピックは延期となり、かわりに多くの番組が放送されるに至った。

表8 戦後75（2020）年の戦争関連『NHKスペシャル』とその強調点

2日	沖繩 “出口なき”戦場～最後の1か月で何が～	■
----	------------------------	---

6日	証言と映像でつづる原爆投下・全記録	■◆◇
9日	渡辺恒雄 戦争と政治～戦後日本の自画像～	□☆
15日	忘れられた戦後補償	◆□☆
16日	アウシュビッツ 死者たちの告白	■◇

戦後 75 年の節目の年。民放、BS も含め全体としては多くの戦争関連番組が放送されたが、アーカイブによる掘り起こしや、BS の報道番組のシリーズなどが多く、NHK スペシャルとしてはやや新奇性に乏しい印象。新型コロナの影響か。戦争の記録への総括（振り返り）的まなざしを保ちつつ、徐々に「戦後～現在の問題」に視線をずらしていく傾向が顕著になる。

表9 戦後 76 (2021) 年の戦争関連『NHK スペシャル』とその強調点

9日	原爆初動調査 隠された真実	◆
14日	銃後の女性たち～戦争にのめり込んだ“普通の人々”～	■◆
15日	開戦 太平洋戦争～日中米英 知られざる攻防～	■◆

東京オリンピックの影響を強く受け、新作が著しく減少した。全体数はさほど落ち込んでいないので、アーカイブ番組と BS 枠がカバーした格好である。ちなみに 12 月 8 日の開戦の日には『新・ドキュメント太平洋戦争 1941』が放送され、5 年をかけたシリーズがスタートする。その前哨として、市井の“普通の人々”に注目する「心性史」的アプローチの番組がつくられたことに注目したい。

表10 戦後 77 (2022) 年の戦争関連『NHK スペシャル』とその強調点

6日	原爆が奪った“未来” ～中学生 8 千人・生と死の記録～	■□◆
7日	戦火の放送局～ウクライナ 記者たちの闘い～	☆
8日	そして、学徒は戦場へ	■☆
9日	混迷の世紀「第1回 ロシア発 エネルギーショック」	☆
13日	新・ドキュメント太平洋戦争 1942 大日本帝国の分岐点（前編）	■◎
14日	新・ドキュメント太平洋戦争 1942 大日本帝国の分岐点（後編）	■◎
15日	ビルマ 絶望の戦場	■□★
20日	ウクライナ侵攻半年 ～“プーチンの戦争” 出口はどこに～	☆

前年の少なさを補うだけでなく、勃発したウクライナ戦争の影響もあり、積極的に番組が制作された。特にウクライナ関連番組がこの期間に三本並び、戦争が過去のものではなく「現実」に存在する危機として強く印象づけられた。また、当事者から新たな証言を得るのも、このあたりが最後のタイミングとなる。前年末始まった『新・ドキュメント太平洋戦争』シリーズも 8 月編成に加わった<sup>33</sup>。

表11 戦後 78 (2023) 年の戦争関連『NHK スペシャル』とその強調点

5日	いのち眠る海 ～最新調査で明かす太平洋戦争～	■◇☆☆
----	------------------------	------

6日	原子爆弾・秘録 ～謎の商人とウラン争奪戦～	■★
7日	発見 昭和天皇御進講メモ～戦時下 知られざる外交戦	■◇
13日	新・ドキュメント太平洋戦争 1943 国家総力戦の真実 前編	■◎
14日	新・ドキュメント太平洋戦争 1943 国家総力戦の真実 前編	■◎
14日	アナウンサーたちの戦争	■【ドラマ】
15日	Z世代と“戦争”	◆☆【討論】

過去放送された番組の続報・追跡番組が並ぶ（その分、新しい主題・切り口に乏しい）。ウクライナ戦争に激化するイスラエル紛争が加わり、若い世代の認識は「戦争がある現実」を受け入れていく方向へスライドしていく。そうした情勢を受けて、終戦の日に8年ぶりに討論番組が復活するが、かつての様々な世代が「将来」を考えるつくりとは大幅に異なり、若者の意識にフォーカスしたものになっている<sup>34</sup>。

表 12 戦後 79（2024）年の戦争関連『NHK スペシャル』とその強調点

6日	原爆 いのちの塔	■◎
15日	新・ドキュメント太平洋戦争 1944 絶望の空の下で	■◎
16日	グランパの戦争～従軍写真家が遺した1千枚～	■☆
17日	“一億特攻”への道 ～隊員4000人 生と死の記録～	◆□◎
18日	“最後の1人を殺すまで”～サイパン戦 発掘・米軍録音記録～	■□

パリオリンピックの影響で戦争枠が限られ、かつ全体に月後半にピークがずれたが、全体を見るとそれなりの数が放送された。特に現在に生きる“普通の”人間が、戦時期を追体験するアプローチによって戦争の不条理との出会いに導かれるような番組が目立つ。異常な事態の中で舐まれる「心理」を扱った番組のメッセージは鋭く、先が見えない「現代の戦争」の膠着状態を映す鏡のようである。

### 3-4 戦後（終戦）80年をどう位置づけるか

8月に放送された『NHK スペシャル』を中心に、数々の番組を迎えることで見えてきたのは、そのコンテンツとしての意味づけの変化である。戦後60年前後は、テレビはその時点での社会的アジェンダを提示しコミュニケーションを支える公共システムであった。しかしその目論見が早々に頓挫して以降、たまたま並行して高度化していったデジタル技術、とりわけアーカイブ機能と表現の幅の広がりをうけ、「記録」としての多層性を刻むようになっていったのだ。

表 13 戦後 80（2022）年の戦争関連『NHK スペシャル』とその強調点

6日	広島グラウンドゼロ 爆心地500m 生存者たちの“原爆”	■
9日	原子雲の下を生き抜いて 長崎・被爆児童の80年	★☆□
●10日	戦争をどう伝えていくか	◆☆◎【ルポ】
15日	新・ドキュメント太平洋戦争 1945 終戦	■◎

15日	新・ドキュメント太平洋戦争 最終回 忘れられた悲しみ	■◎
16日	シミュレーション昭和16年夏の敗戦前編	◆◎【ドラマ】
17日	シミュレーション昭和16年夏の敗戦後編	◆◎【ドラマ】
18日	“戦争を歌う” 人気絶大ラッパー-ZORNとZeebra	☆

いよいよ証言に頼る制作が出来なくなり、リサーチ網を広げても新資料の発掘はある程度「偶然」に任せざるを得ないといった限界が、避けがたく立ちはだかるようになった。その結果がドラマ的“物語”手法や、伝える行為そのものに光を当てるアプローチの多用につながったということだろう。その中でも『新・ドキュメント太平洋戦争』の育児日記で語り掛けられていた“娘”の存命の事実<sup>35</sup>、『シミュレーション』への遺族の訴えは、「記憶主体の生の連続性」と「歴史化」の間のコンフリクトの証として、真剣に受け取らざるを得ない。

ところでここまで11年間、番組ラインナップ、編成の推移、さらには20年前の戦後60年（もしくはそれ以前）からの流れを確認してきた。以下、暫定的に問題の整理を行っておく。

### ① 「戦争関連」番組を成立させるための「素材」

11年間の8月の『NHKスペシャル』を辿ることで見えてくるのは、そのコンテンツとしての成立要件の変化である。戦後60年から62年（2007年）までは、少なくともテレビには社会的アジェンダ・セッティングを行う、公共コミュニケーション装置としての「了解」があった。しかしそれは、急激なデジタル・ネットワークへのヘゲモニーの移動によって崩れていった。そこに「証言」や資料の発見による新事実入手の困難さが重なり、徐々に「戦争を考える」という問いが成立しにくくなっていったのである。

しかし冷静に考えるならば、「あの戦争」という数十年前の出来事を語るうえで、常にそうした「新しさ」を備給せねばならないという命題の根拠は乏しい。むしろそれこそテレビというメディアの宿命（「いま・ここ」性、あるいは「現在主義」）の顛れと解釈すべきだろう——デジタル・ヒストリー的新技術や、カラー化などの新表現の積極活用も、視聴者がそれらを“求めている”と思いたい制作者の自意識であり、ハビトゥスであった。そうであるなら、テレビの覇権の喪失（オワコン化）、デジタル・コンテンツとしての相対的ポジションへの「下野」は、逆にその十字架を下ろすチャンスであると捉えることもできる。

### ② 編成の思惑と、外的要因（オリンピック、災害、現代の戦争）

戦後60（2005）年8月の編成は、「（それほど時間が自由になる人はいないにせよ）毎日テレビをしっかりと見て考えてくれる（真面目な）視聴者がいる」という虚構のもとに組まれていた。しかしその美しいシナリオは、様々な要因によって阻害され続ける。その最大の壁がオリンピックだったというのは、なんとも皮肉である。ナショナリズムの現代的形象であるこのメディア・イベントはまさにテレビとともに成長し肥大した。2005～7年の編成構想も、2011年の東日本大震災を引き金にじわじわ広がった原爆と原発をつなぐ歴史観も、ブレーキをかけたのはオリンピックだった（2008年：北京、2012年：ロンドン）。

しかも東京オリンピックとコロナが同期したという現実、「ひきこもる」内向きの感性を刺激し、間違いなくこれまでとは異なる意味で、テレビの衰退を加速させた。というのも、そもそもかつてテレビを求めた人々の意識は、「世界を見たい」という開かれの欲望に支えられていたからだ。目に見えないウイルスの恐怖は、文字通りネットワーク技術の力を借りて、世界を裁断し、フィルターバブルとエコーチェンバーを後押しした<sup>36</sup>。そこに加わるウクライナとパレスチナからの配信映像は、まさに「パラレルワールド」の現前そのものであった。

この押し寄せるさまざまな外部要因は、かつて我々が共有していた「戦争」を語るコンテキストを引き裂いた。その典型例が「世代ごとの理解に寄り添った放送が必要である」という過保護な配慮である。各々スティッキーなメディアが異なるという認識に根差したもののだが、それを前提にするならば「当該世代は、最初からテレビモニターの前にはいない」——それに薄々気づきながら、それでも放送を続ける矛盾から逃れることはできなくなっている。

### ③ 8月15日（終戦の日）の番組を読む

8月上旬でも『NHKスペシャル』が放送される日とされない日があり、それは年によって異なる。そうした中でも15日の終戦の日だけは例外なく「戦争」が配されてきた。しかし列挙してみるとその番組内容は様々で、何らかの編成方針があるようには見えない。むしろ「今、放送すべきテーマ」を年ごとに検討した結果だと見るならば、その揺らぎはNHKが察した空気感であると言えないこともない。

#### <8月15日の『NHKスペシャル』タイトルの変遷（戦後70～80年）>

- 2015年 戦後70年 ニッポンの肖像 -戦後70年を越えて-【討論】【ルポ】
- 2016年 ふたりの贖罪（しょくざい）～日本とアメリカ・憎しみを越えて～
- 2017年 戦慄の記録 インパール
- 2018年 ノモンハン 責任なき戦い
- 2019年 全貌 二・二六事件～最高機密文書で迫る～
- 2020年 忘れられた戦後補償
- 2021年 開戦 太平洋戦争～日中米英 知られざる攻防～
- 2022年 ビルマ 絶望の戦場
- 2023年 Z世代と“戦争” 【討論】【ルポ】
- 2024年 新・ドキュメント太平洋戦争1944 絶望の空の下で
- 2025年 新・ドキュメント太平洋戦争1945 終戦、最終回

この多様さは、そのまま「戦争」という主題の射程の広さを表している。インパールやノモンハンなど一定の知識を持つ層を意識した主題。二・二六のように歴史を遡る、あるいは戦後補償のように現代に引き寄せるアプローチ。そうかと思えば「憎しみを越えて」といったエモーショナルな設定、さらには戦後60年で試みた「対論」の復活…。そして戦後79年から80年は、5年間かけたシリーズのゴールが「終戦の日」の放送となった。

ともあれここまでは「8月15日は戦争を総括する」という慣習は継承された。果たして今後はどうなるのだろうか。

#### ④ ドラマの誘惑とリスク

8月の戦争関連番組の編成の中で、かつてはドラマの特番も『NHKスペシャル』の枠の中で放送されていた。特に2007～2010年は映像の支えが乏しい記憶を補うものとして、積極的に制作された。だが2011～2014年は8月編成から一時的に消え、2015（戦後70）年にまた番組表に帰ってくる——しかしそれは『NHKスペシャル』とは別枠で、「特集ドラマ」「終戦ドラマ」という表記での放送だった。その後ドラマは、2016、2017年には放送されなかったが、2018年からは各年一作品が放送されるというペースが続くようになる。

戦争というハードな題材に対し、ドラマはそのハードルを下げ、接近しやすくさせる「入門編」の役割を担ってきた。その意味ではNHKよりもむしろ民放が得意とするジャンルであった。TBS『さとうきび畑の歌』（2003年9月28日放送）に代表されるような話題作を、各局は人気俳優やタレントを起用し、競い合って制作した<sup>37</sup>。NHKはそうしたコマーシャルな狙いとは別に、特に2018年以降は、8月の戦争関連番組のもう一つの柱としてドラマ企画を位置づけ、毎年『NHKスペシャル』の空白日を埋める役割を果たした。

ドラマには必ず主人公が存在し、その人物を通して語られるストーリーがある<sup>38</sup>。8月の戦争ドラマは、戦後70年以降徐々にドキュメンタリーが追いきれなくなった「人生と歴史」の関係を描く受け皿になっていった。ゆえにNHKは、カタルシス（浄化）をゴールとする民放ドラマとは一線を画し、「戦争に翻弄される人生」を描く脚本・演出を用意してきた。そしてその割り切れなさは、時に「戦争を語る」ことそのものの課題を浮かび上がらせる役割を果たしてきたといえよう。

#### <8月上旬『NHKスペシャル』枠外で放送された特番ドラマ>

- 2015年 一番電車が走った（10日）
- 2018年 夕凧（なぎ）の街 桜の国2018（6日）
- 2019年 マンゴーの樹の下で「ヘルソン島、戦火の約束～」（8日）
- 2020年 太陽の子（15日）
- 2021年 しかたなかったと言うてはいかんです（13日）
- 2022年 アイドル（11日）
- 2023年 軍港の子～よこすかクリーニング1946～（8日）
- 2024年 昔はおれと同年だった田中さんの友情（15日）
- 2025年 八月の声を運ぶ男（13日）

この11年間の中では、2020年の『太陽の子』、2021年の『しかたなかったと言うてはいかんです』で、科学者の葛藤が描かれたことは特筆すべきであろう。そうした苦悩は、さらに2025年の『八月の声を運ぶ男』に引き継がれる。前年に続いて「戦後」が舞台だが、戦争その

ものではなく、「記憶の継承」「語り・伝え」の正当性を問うというアポリアを取って主題に据えた作品だ。「証言にはどこまで体験者固有の記憶が求められるのか」——その問いは、修正主義とフェイクニュースが飛び交う現代において、「戦争」を語ること自体の困難さを突きつける。

『NHK スペシャル』の枠内でも、戦争を扱う素材が乏しくなってきた状況をうけ、全体としてはドキュメンタリーの構えで全体を構成しつつ、ドラマやその手法を用いた再現シーンに頼るものが増えた。しかし 2025 年の『シミュレーション昭和 16 年夏の敗戦』（16、17 日）は逆であった。「ドラマ×ドキュメンタリー」と称し、基本はドラマであるが一部（最後の 10 分）ドキュメンタリー部分を添えることで、そのストーリーを客観化させようとしたのだ。だがそれに対して関係者は激怒し、「事実と異なる描写である」として提訴するまでに至った<sup>38</sup>——この騒動には、旧来のテレビ・ジャンル論の危機が映し出されていた。この事件の最大の問題は（正当な訴えか否かとは別に）これを機に「お蔵入り」となってしまふことのリスクにある。むしろこの番組が 2025 年に放送されたという出来事を、映像とともに「史料」としてアクセシブルにする必要がある——何よりも、将来の「戦争に関する語り」を守るために。

#### 4. そしてテレビ番組は「歴史資料（史料）」になる

##### 4-1 同時的解釈と時差が織り込まれた解釈

<p>【同時的／間接】 コソのコミュニケーションの言葉 礼儀作法の決まった振る舞い ラジオやテレビの「生」放送 先住民の狼煙</p>	<p>【同時的／直接】 （「表すもの」と「表されるもの」 の共視前） 会話での物まね 動物の行動 デモ 風向きを示す風見鶏 火を表す煙</p>
<p>【時差的／間接】 テキスト一般 美術館の絵画 ラジオやテレビの録音・録画番組 この本</p>	<p>【時差的／直接】 （「表すもの」と「表されるもの」 の時間差のある記号の延長） 遺跡 刷印 痕跡一般 使葉の残り香 灰</p>

図 2 記号論的切断とメディアの分類  
(ブーニュー2010:85 を図示)

デジタル・メディアが出現するまで我々は、テレビを代表格とする「マスメディアとは何か」という問いについて、本質的な議論を展開することはできなかった。特にインターネットの黎明期においては、自分たちのポジションを脅かすモノという敵愾心が前に出て、冷静さが欠けていた面があったことは否めない。そこに「地上デジタル放送」という混合物の出現とその移行計画の本格化が重なった。グラデーションと対立が複雑に絡みあい、二つのメディア表現の間に敷居・断層線を引くことは容易にできない

と、気づくのが遅れた。実際、地上波のアナログからデジタルへの置き換えは、当初の夥しい懸念の声に反し、終わってみれば大きな滞りもなくオーディエンスの「転居」は完了した。だがそれは技術的無意識の支えによるものだった。言い換えれば我々はアナログな感性のまま、デジタル環境が与える記号過程を受け入れ、生活を続けることになったわけだ。

ダニエル・ブーニューは、この無意識の傘に覆われたメディア機能のメタレベルの棲み分けを、「同時的／時差を伴う」「直接／間接」の二軸でマトリックス化している（ブーニュー2010:85）。この分類を見ると、基本的に我々が安心して「記録」として向き合ってきた媒体は、おおよそ第三象限（左下）の「時差／間接」の範囲にあることがわかる。しかしことはそう簡単ではない。ラジオやテレビ（放送）は、「同時的」であることと「時差をとまなう」ことの間

を行ったり来たりするのだ——それは送り手と受け手の間で揺れ動く。常に同時的であるのはネットワークを情報が動く（発信される）その時だけであって、受け手の「いま・ここ」と送り手のそれを想定した時間操作は、基本的に双方の認識のズレの渦中に置かれているのである。

この「生中継」と「コンテンツ流通」の間の「どこで意味が着地するか」の読みにくさは、アルトグが指摘する「過去・現在・未来の分節化」のメカニズムに由来し、その困難さは「戦後」の「時間の裂け目（断層）」とともにあること（アルトグ 2008 : 22-29）として遡及的に認識されるようになった。この「裂け目」の広がりこそが彼の謂う「現在主義」であり、とりわけそれは「戦争」のような理不尽な経験を語る機会にこそ表れる。だからこそその時代のメディアが「過去の事実であり」「同時代の出来事であり」「未来にもおこりうる」恐怖とともにそれを表象してきたという事実をアーカイブとして残す意味があるのだ。

さらに言うならば、終戦から 70 年以降の所謂「風化」の時代に、アナログメディアとしての放送機能の摩耗、記号論的切断の「オン・オフ」のスイッチを見失いつつある現実が表れている点は<sup>39</sup>、もしかするとそれ自身が、「戦争を語る作法」を支えるレジーム（「歴史の体制」）の黄昏を表しているのかもしれないという洞察にむすびつく——戦争に関連するテレビ番組を「史料」として扱う意義は（要件的にそれを満たしているか否かではなく）、それをメタレベルで検証する必要性に根差しているのである。

#### 4-2 メディア分析の歴史学への貢献

ここで考えてみたいのは、我々の生活圏におけるデジタル環境の浸透とマスメディアの同時性の希薄化が、「現在主義」のインフラ自体の破壊、すなわち時間感覚そのものの無力化に直結するものなのかどうかである。それはこと「戦争」について言うならば、「過去」の耐えがたき経験が、「現在」に、また「未来」にも起こりうる蓋然性について、過去・現在・未来を分節する（不安定とはいえ、行き来可能な）「時間秩序」が緩んだとき、我々の思考はどのようなミュトス（筋）によってそれを統合形象化するのか（リクール）という問いにつながる。それは新たな「歴史の体制」を象徴するものなのか、それとも「歴史」そのものの放逐なのだろうか。

アナログ地上波というテレビの技術的制約条件は、時間と空間の一方向性を基礎にオーディエンスを広げ、コミュニケーション環境における「マスメディア」的秩序のデファクト化を押し進めてきた。特にこの国においては、その普及と「あの戦争」への反省が、同期して言説を重ねてきた。そのテレビが産出し続けた「いま・ここ」性とそれが保証するコノテーションが、それを可能にしてきたという逆説——しかしいわばこれもまた一つの「歴史」である。デジタル技術のレイヤー構造をベースに、双方向かつ時差性を前提とする認識を基盤とする新メディアが人々の欲求を刺激する今日、瞬間間にそのレジームは掘り崩された。それはメディアの主要交代だけでなく、我々の時空間認識それ自体の転回点を指し示している。デジタルアーカイブの課題は、そこから始まる。

その転回は、ブルーノ・ラトゥールがモダニズムとその批判であるポストモダニズムの構築性／相補性を乗り越える道として、アクター・ネットワーク・セオリーを提示したことに相応している（ラトゥール 2019 : 84）。ラトゥールが「連関」の概念をもとに社会学や技術哲学の

あり方を組みかえた発想は、ヘイドン・ホワイト以降の停滞を脱し、「次の歴史学」の構想が切実に求められていることを示唆している（エヴァンス 2022：185-188）。そのヒントは「戦争」という事象が「書き取りシステム（キッター）」としてのテレビによってどのように扱われてきたのか、その記録自体を「歴史資料（史料）」として措定する行為の中にある。その作業を我々は、既に時間の磁場が弱まったデジタル的認識世界に放り込まれていることの自覚を持って着手する必要がある。

先に見てきた、2015～2025年間の『NHK スペシャル』の主題、素材、表現方法の変化はまさにその視座から捉えるべきものである。特にその中でも80年という時間の経過によって到達した混迷——素材の多様化、外的要因の影響、認識の揺さぶり、ドラマ化の誘惑などの現象各々が、15年に亘る「あの戦争」の当事者であったこの国の「責任」を、どのようなまなざしで記述するのか——語られる事象も、語り記録する主体も、媒体も、さらにはそれを受容し読み取る主体も、いずれの足場もぐらついている中で大量に積み重ねられるメディア・コンテンツの歴史性は、いかなる方法で落ち着かせることが可能なのだろうか。

その問いはむしろ、その事象に関わるあらゆるアクターの歴史的関係性をクローズアップさせ、日の当たる認識の対象に引き上げる力となる。本稿で扱った『NHK スペシャル』にはその可能性がある。すなわち歴史資料（史料）として批判に晒すことが可能なかぎりにおいて、その（史料の）名を与えるという——いかなる歴史学にも通底する再帰性、見直しを経てなお揺るがない原則を、最も広範な私たちで（かつ悪しき相対主義に陥らない限りにおいて）体現している——そのような仮説のもとに、検証は重ねられる。モミリアーノが頑固に踏み止まったように、単に過去の出来事を記述し、その考証を行うことと、歴史学の本来の使命は異なるところにある。また、そこにおいて叙述は高度に自由でなければならないが、繰り返されるホワイト批判を見てもわかるようにそれだけでは足りないことも我々は熟知している。

歴史学の使命は、単に「過去について正しい言明を行う」という規範に頼るだけでは既に不十分なのである。「歴史的言明はひそかなる予言である」というプラグマティストたちによるテーゼ（ダント 2024：62）に従うならば、それは単純な時制にもとづく「過去」のみが対象ではなく、現在も未来もありうるものとしての「普遍」に語り掛けるものでなければならない。テレビ番組の表現の変化、その中で揺れ動く「テレビが戦争を扱う意味」に関する送り手—受け手間の了解は、まさにそこにアプローチする階梯として、記録すべき対象たりうるのだ。

仮にもしも今後テレビ（あるいはそれに代わるメディア）が戦争の多様な顔を捉えきれなくなったとき、また誰もがそこから目を背け、それについて語らなくなったときが到来したら、その時こそが真の破局の始まりだといえよう。しかし、未だ放送そのものの自意識は、その遙か手前にあり、実証主義的な「出来事史」の範疇でしか自らを捉えることができていない。欠けているパズルのピースはたくさんありすぎる。

戦後81年目は、そうした観点から言って、何重もの意味で大切な年になる。引き続きメディアの動きには、目を光らせていかねばなるまい。

註

<sup>0</sup> 終戦×年と呼ぶか戦後×年と呼ぶかは、本稿では統一せず、文脈に応じて使い分けるものとする。

<sup>1</sup> 「言説は——歴史が絶えず我々に教えてくれるとおりに——ただ単に闘いや支配のシステムを物語るものであるばかりでなく、闘いの目的および手段でもあり、奪取が目指される権力でもあるからです」(フーコー2014: 13)

<sup>2</sup> トバチョール・ハサン「明治百年祭(1968年)から見る「戦後」意識と近代化の記憶—万博、オリンピックとの関係」(2018、サントリー文化財団研究助成報告)(閲覧日 2025年12月20日)

<https://www.suntory.co.jp/sfnd/research/detail/2016505.html>

<sup>3</sup> 「歴史の体制は、時間の様々の経験から発するものであり、ひとつの時間やすべての時間や時間全体ではなく、何よりも、まさに過去・現在・未来の分節化の自明性が失われるときにどこにでも現れる時間の危機の契機をよりよく把握するために役立つような、発見に寄与する(heuristique)方途となることを目指すものである」(アルトグ 2008: 43-44)

<sup>4</sup> 元 NHK の宮本聖二によれば、制作者たちが徐々に証言を録ることが困難になることへの危機感を高めていったのは 2000 年頃、証言をアーカイブして公開するという企画を提出し、実際に構築をすすめたのが 2007~8 年頃とのこと。(鼎談「宮本聖二×水島久光×岡本真 戦争の記録と記憶をつなぐ—メディアと施設の連携をめざして」(『LRG』36号「特集 戦争の記憶と記録」2021、アカデミック・リソース・ガイド(株))

<sup>5</sup> 戦前戦中は、放送(ラジオ)はもっぱらプロパガンダの手段であったという意味も含めて、戦後の民主化との連続性がなぜ同じ技術基盤の上に可能になったのかを考える必要がある。それは「技術の中立性」を謂って、片付く問題ではない。

<sup>6</sup> この点が実は本稿の表題の背景にある、もう一回り大きな主題である。筆者は、メディア論を足場に学際的論考を重ねる中で、「放送」に代表されるメディアの拡張への志向性(マス化)は、資本主義の拡大再生産の原理と同期したものであるという認識を持つようになった(水島 2008: 10-20)。

<sup>7</sup> 例えば最近の成果としては大森淳郎『ラジオと戦争—放送人たちの「報告」』などに著されているが、この著作のアンビヴァレントな性格については、筆者は書評で述べている(共同通信を介して、全国の地方紙に配信: 水島久光「権力内面化のメカニズム」沖縄タイムス 2023年8月26日。(閲覧日 2025年12月20日) <https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/1211082>。

<sup>8</sup> NHK 放送総局ライツ・アーカイブセンター 編「NHK アーカイブスカatalog: NHKは何を伝えてきたか: テレビ番組放送記録+番組小史 1953~2008」(非売品、2008)。

<sup>9</sup> 具体的な事例としては「人文学オープンデータ共同利用センター (Center for Open Data in the Humanities / CODH)」など。(閲覧日 2025年12月20日) <https://codh.rois.ac.jp/about/>

<sup>10</sup> ピーター・バークはこうした動きを『アナール』に閉じることなく、カルロ・ギンズブルグの「ミクロストリア」や、様々な社会学との交差領域も含めて捉えている。アナール学派を出自とするアラン・コルバンも、同様のパースペクティブを有しているが中でもフーコーの仕事をそこに位置づけている点は注目し得る(『めくるめく輻輳』: コルバン 1992 所収、水島 2020 参照)。

<sup>11</sup> 歴史学の言語論的転回(第二次)とも言われるこの問題意識は、ポール・リクール『時間と物語』(1983-5)と同じ地平にある。イヴァン・ジャブロンカの『歴史は現代文学である』(2014)といった挑発

も、その延長線上にある。

<sup>12</sup> モミリアーノ（モミツリヤーノ）はヘロドトス、ギボンに遡り、歴史家とアンティクアリアン（古事学家）、エリュディ（考証家）の役割を分ける（モミツリヤーノ 2021：30、141）。エリュディの行為には、アンティクアリアンのそれよりも解釈の要素が入る。

<sup>13</sup> リクールは歴史叙述とフィクション物語の間に相互に「借用」「交叉」関係があると言う（リクール 2004：145）。

<sup>14</sup> ピーター・パークも同様に謂う。「必要とされているのは（すでに論じられた写真や、その他の史料のケースと同様に）、新しい『駆け引きの術（古文書学）』なのである」（パーク 1996：24）。しかしそれはどのようなものか、そこで論じてはいない。

<sup>15</sup> 制作体制も報道局、制作局に属しない「特別」な位置づけが与えられ、「大型企画開発センター」が管轄し、部署横断でスタッフィングがなされてきた（2022年まで）。

<sup>16</sup> そもそもは黒柳徹子の「来年はどんな年になりますかねえ」という何気ない問いかけに答えたもので、「誰も予測できないですよ、これはねえ」という留保とともにポロっと出てきたものだ。黒柳もそれに対して、掘り下げることせず受け流し、別の問い（「何をしたらしゃるときが一番幸せですか」と）話題を変え、タモリは「いやあ、何でしょう、昼間からビール飲んでるときですか」と返し、二人は談笑する——映像はそれだけである（水島 2025：70-71）。しかし、これに“リベラル”を自認する人々は一斉に反応し、出版界も動いた。たとえば金平茂紀＋大矢英代『「新しい戦前」のなかでどう正気を保つか』（かもがわ出版、2023）、内田樹＋白井聡『新しい戦前—この国の“いま”を読み解く』（朝日新書、2023）など。

<sup>17</sup> 上記註のような動きについて、筆者は以前、現代記号論の創始者であるチャールズ・S・パースの「連続する記号過程」の理論を拡張して、「突然現れた記号（言葉）に対し、それを意味づけする事柄を次々人々は集めようとする」現象の説明を試みた。その時に事例として用いたのは9.11（2001年9月11日）の「米国同時多発“テロ”」という名辞についてである（水島 2004）。

<sup>18</sup> 『NHK スペシャル（1989～）』の草創期に制作されたドキュメンタリー・シリーズ「アジアと太平洋戦争』（1991年8月：第一期4作品、1992年8月：第二期2作品）について、ここでは触れておきたい（水島 2022：52-53）。これらは、かつての大東亜共栄圏のスローガンを、その舞台となったアジア各国（インドネシア、タイ、フィリピン、シンガポール、中国、そして当時領有していた朝鮮半島）の主体による解釈に晒すと言う、非常に困難なテーマで貫かれている。これらの作品で一気にアジアに視野が広がり、次いで1993年の河野談話も重なって、「戦争」を回顧する語りはモノログから対話（ポリログ）に開かれる——という流れが生まれる「未来」もあり得た。しかし、報道のまなざしは、慰安婦問題（とりわけ軍の関与）に焦点化していく。それがその後のバックラッシュの引き金になった可能性がある。

<sup>19</sup> 慰安婦問題に焦点化されたことによるバックラッシュは、NHKだけでなくその後朝日新聞も襲った。2014年8月5日、6日の慰安婦問題の検証特集記事の「証言」と、それを「虚偽」と判断して取り下げたことに関わる騒動は裁判にまで発展した。この事件が、本稿の主題でもある「戦後70～80年（2015～2025年）」の間の番組編成に影響した懸念は拭えない（詳しくは、北野 2020 参照）。

<sup>20</sup> 戦後平和教育に関する検証は、今後の課題であるが、とりあえずその問題意識については水島 2020：225-231、水島 2025：58-62 参照。なお本稿では「あの戦争」という言葉をしばしば用いるが、それはこの国の人々が戦争を振り返るとき、その固有性を取って定義せず、こうした指示詞をもちいて対象を曖昧

にしてきた（つまり個人的な体験に閉じたパースペクティブで語ってきた）ことを踏まえていることを示している（水島 2020 : 13）。

<sup>21</sup> 平和教育においても「ヒロシマ、ナガサキ」がその入門編に置かれていることに注意を払いたい。

<sup>22</sup> 具体的番組名は、2006年8月13日『NHK スペシャル 日中戦争—なぜ戦争は拡大したのか』、8月14日『NHK スペシャル 日中は歴史にどう向き合えばいいのか』、8月15日『日本の、これから もう一度話そう アジアの中の日本』、2007年8月13日『NHK スペシャル A級戦犯は何を語ったのか〜東京裁判・尋問調書より〜』、8月14日『NHK スペシャル パール判事は何を問いただしたのか〜東京裁判知られざる攻防』、8月15日『日本の、これから 考えてみませんか？憲法9条』

<sup>23</sup> この年の原爆忌前後の番組4本（『被爆者命の記録〜放射線と闘う人々の60年』、『ZONE・核と人間』、『追跡 核の闇市場〜放置された巨大ネットワーク』、『赤い背中〜原爆を背負い続けた60年〜』は、広島・長崎の原爆被害ではなく、核問題（放射線の医学的問題、核エネルギーと表現、核と経済、そして核廃絶運動）を主題としている点に注目すべきである。

<sup>24</sup> 2007年8月、NHKは「Sengo62」と名づけた特設サイトを設け、戦争関連番組のみの番組表を掲示し、視聴者が編成＝相互の番組の関係を意識することを期待した（水島 2020 : 42）。

<sup>25</sup> 『NHK 特集』～『NHK スペシャル』に連なるNHKのドキュメンタリーの系譜には、『現代の映像』（1964-71年）～『ドキュメンタリー』（1971-78年）以外に、『ある人生』（1964-71年）～『人間列島』（1971-72年）のラインがあった。「ひと」にフォーカスする番組のトーンは、当然当時の人々全てが何らかの「戦争体験者」であったことを意識したもので、この時代は「人生（個人の記憶）と歴史（社会の記憶）」が交わる点を「戦争」が担っていた（水島 2020 : 85-90）。

<sup>26</sup> メモリアルは単なる過去を時間的に堰き止める節目ではなく、「（それを機に）思い出す」「記憶にとどめる」という心理的な動き（行為）を促す契機である。この行為の支えとなるものがコノテーション（集団的含意）であり、ロラン・バルトはそれが「合理づけられて、真の意味での史的人類学に近づく」という（『記号学の原理』）。

<sup>27</sup> 戦後の平和主義は、ある意味、もともと人間に備わった暴力的欲望を抑え込む（去勢する）ことによって規範として成立させてきたともいえる。その箍が外れたとき、その欠如を埋める対象を再び探し求める、ある種ジャック・ラカンの精神分析の原理そのままの現象がここで出現する（水島 2004 : 33）。

<sup>28</sup> 付録に記載した EPG 用紹介文で、この分析の根拠に該当する部分にアンダーラインを引いた。直接それが表現されている（「証言を得た」「資料が発見された」など）ものもあるが、筆者の解釈によるものもある。

<sup>29</sup> TBSは「テレビ60周年特別企画」として2015年夏、松島奈々子主演のドラマ『レッドクロス〜女たちの赤紙〜』（8月1日、2日）と同名のドキュメンタリー『千の証言スペシャル 女たちの赤紙』（8月2日）を放送している。この企画は、日本赤十字社が戦時下の看護婦たちの救護活動に関する調査研究と資料を公開したことに端を発する（川嶋ほか 2016）。新しい資料の発掘は番組制作の大きな原動力だが、このように局をまたぎ、またドラマとドキュメンタリーを重ねて複数の番組がつくられるケースは珍しい（水島 2022 : 54-56）。

<sup>30</sup> この出来事は、「あの戦争」の終わり（玉音放送）を天皇がメディアを通じて「自らの言葉であらわした」という同じ意味で、歴史的な事象と捉えるべきである（水島 2020 : 10）。

<sup>31</sup> 「むしろ戦後ゼロ年こそ、バブル以降の平成日本と通底するリアルな日本の原像ではあるまいか。とすれば、戦後ゼロ年はまだ終わっていない」「おそらくその通路は、七三年後のいまに直結する、秘密の抜け穴になっている」（貴志 2018：導入ページ）

<sup>32</sup> ドキュメンタリーとは、その名付け親であるジョン・グリアソンが ロバート・フラハティの作品『モアナ』（1926）を評して言ったとされる「現実の創造的表現である」という定義が今日も用いられるが、ここでいう「現実」は「現前（目の前のあらわれ）」を指していると解釈すべきであろう。よって、ここで「ドキュメンタリー」というジャンルを示すのは、かつての「戦争」の現前性を捉えたものと認識できるからである。なお、ここにリストアップした『戦没者は二度死ぬ～遺骨と戦争～』が『NHK スペシャル』枠から外れているのは、単純に制作体制の違いであろうと考えられる。

<sup>33</sup> 『新・ドキュメント太平洋戦争』シリーズは、「エゴドキュメント（日記や私的な手紙・書簡など）」を主たる資料に据え、等身大の人間個人の視線から番組を構成するという意欲的な目論見で計画された。当初は「AI 技術を用いて解析」という点にもアピールポイントが置かれたが、徐々にその部分は後退する。筆者は第一回放送にも出演、「エゴドキュメント」に関するリサーチにも協力した。

<sup>34</sup> 若い世代の「戦争に対する感覚的な“遠さ”」を意識した番組づくりは、戦後 70 年以降急速に増加する。『NHK スペシャル』枠には入らないが、2018 年から、ヒット映画『この世界の片隅に』を受けてスタートした『あちこちのすずさん』（～2025）や、『ドラマ×マンガ』シリーズ（～2021）、さらにはローカルでは SNS を用いた『ひろしまタイムライン』（2020）など。

<sup>35</sup> 育児日記を書き残した女性「金原まさ子」（俳人、1911～2017）は、このシリーズで唯一、全回においてその文面が紹介される。そこに表れた“愛する娘に語り掛けながら、自ら総動員体制を内面化していく”心の動き、また最終回で語る「戦後」とのメンタリティの落差は衝撃的でした。

<sup>36</sup> コロナと東京オリンピックの関係で言えば、BPO の審議案件ともなった番組『河瀬直美が見つめた東京五輪』（2021 年 12 月 26 日 NHKBS1）の問題は象徴的であった（決定文第 43 号）。筆者は、さらにこれにテレビの変質が絡んでいると後に論述している。「河瀬直美が見つめた東京五輪のいくつもの「時間」「リミックス」の倫理性—メディアを横切る『時間と物語』（水島 2023）

<sup>37</sup> アルジルダス・グレマスの「意味の四角形」によれば、物語は正邪の「対立」と「矛盾」の間で動き出す。ドキュメンタリーもそもそも「現実」を「物語的」に描く手法ではあるが、そこにドラマ的フィクション表現を安易に持ち込むならば、一層その“わかりやすさ”は現実解釈の妨げになりかねないリスクとなる（ジェイムソン 1988：166-175）

<sup>38</sup> 「戦後 80 年番組で「祖父の名誉傷つけられた」 遺族が NHK など提訴」（朝日新聞、12 月 24 日）  
<https://www.asahi.com/articles/ASTDS1QMLTDSUCVL026M.html>

<sup>39</sup> 「記号圏はモノから隔たったところで展開する。地図が土地でないように、記号が、それが指示するモノから切り離されている（とはいえ、指標では混同される傾向がある）。つまり、「犬」という言葉は、そのイメージと同様、噛みつきはしない」（ブーニュー 2010：202）。

## 引用文献

### 【新しい歴史学について】

フランソワ・アルトール『「歴史」の「体制」—現在主義と時間経験』伊藤綾訳、藤原書店、2008

水島久光

ピーター・バーク編『ニュー・ヒストリーの現在—歴史叙述の新しい展望』谷川稔・谷口健治ほか訳、人文書院、1996

アラン・コルバン「めくるめく輻輳—名前なき歴史を粗描的に展望する」(『浜辺の誕生—海と人間の系譜学』福井和美訳、藤原書店)、1992

アーサー・C・ダント『物語としての歴史—歴史の分析哲学』河本英夫訳、ちくま学芸文庫、2024

リチャード・J・エヴァンス『歴史学の擁護』今関恒夫・林以知郎・奥田純訳、ちくま学芸文庫、2022

ミシェル・フーコー『言説の領界』槇改康之訳、河出文庫、2014

リュシアン・フェーブル『歴史のための闘い』長谷川輝夫訳、平凡社ライブラリー、1995

カルロ・ギンズブルグ『歴史を逆なでに読む』上村忠男訳、みすず書房、2003

ヘイドン・ホワイト『メタ・ヒストリー—十九世紀ヨーロッパにおける歴史的想像力』岩崎稔監訳、作品社、2017

イヴァン・ジャブロンカ『歴史は現代文学である—社会科学のためのマニフェスト』真野倫平訳、名古屋大学出版会、2014

モミッリャーノ『歴史学を歴史学する』木庭顕編訳、みすず書房、2021

ブリュノ・ラトゥール『社会的なものを組み直す—アクターネットワーク理論入門』伊藤嘉高訳、法政大学出版局、2019

小田中直樹編訳『歴史学の最前線—(批判的転回)後のアナール学派とフランス歴史学』法政大学出版局、2017

【言説、記号、コミュニケーションについて】

ロラン・バルト『記号学の原理』(『零度のエクリチュール』渡辺淳・沢村昂一訳、みすず書房)、1971

ダニエル・ブーニユー『コミュニケーション学講義—メディアロジーから情報社会へ』水島久光監訳、西兼志訳、書籍工房早山、2010

ハンス・ゲオルグ・ガーダマー『ガーダマーとの対話—解釈学・美学・実践哲学』カルステン・ドット編、巻田悦郎訳、未来社、1995

ポール・リクール『時間と物語【I】(新版)』久米博訳、新曜社、2004

フレドリック・ジェイムソン『言語の牢獄—構造主義とロシア・フォルマリズム』川口喬一訳、法政大学出版局、1988

【「あの戦争」】について

大森淳郎『ラジオと戦争—放送人たちの「報国」』NHK出版、2023

川嶋みどり・川原由佳里・山崎裕二・吉川龍子『戦争と看護婦』国書刊行会、2016

貴志謙介『戦後ゼロ年東京ブラックホール』NHK出版、2018

北野隆一『朝日新聞の慰安婦報道と裁判』朝日新聞出版、2020

桜井均『テレビは戦争をどう描いてきたか—映像と記憶のアーカイブス』岩波書店、2005

米倉律『八月ジャーナリズムと戦後日本—戦争の記憶はどう作られてきたのか』花伝社、2021

【自著】

水島久光『閉じつつ開かれる世界—メディア研究の方法序説』勁草書房、2004

水島久光『テレビジョン・クライシス—視聴率・デジタル化・公共圏』せりか書房、2008

- 水島久光・西兼志『窓あるいは鏡—ネオ TV 的日常生活批判』慶應義塾大学出版会、2008
- 水島久光「ミシェル・フーコーと「玉ねぎの皮」—デジタル・メディア社会の時空間構制論」（松本健太郎編『理論で読むメディア文化—「今」を理解するためのリテラシー』新曜社）、2016
- 水島久光『メディア分光器—ポスト・テレビからメディアの生態系へ』東海教育研究所、2017
- 水島久光『戦争をいかに語り継ぐか—「映像」と「証言」から考える戦後史』NHK 出版、2020
- 水島久光・小林直毅「アーカイブは「放送」と「放送研究」の何を変えようとしているのか？」（『ジャーナリズム&メディア』16号、日本大学法学部 新聞学研究所）、2021
- 水島久光「テレビ映像アーカイブと“描かれざるもの”の関係」（『Intelligence』22号、20世紀メディア研究所）、2022
- 水島久光「放送のリミックス——その「結び目」の緩みと「時間」（谷島貫太・松本健太郎編著『メディア・リミックス—デジタル文化の〈いま〉を解きほぐす』ミネルヴァ書房）、2023
- 水島久光「“語り継ぐ”ことのアポリア——記憶から記録へ、時代の転換点としての八十年」（『東洋学術研究』第64巻2号、（公財）東洋哲学研究所）、2025

■付録 2015～2025年の8月の戦争を題材とした『NHK スペシャル』、ドラマ、ドキュメンタリー  
(分析の注目点に下線)

## 【2015年】

きこの雲の下で何が起きていたのか(6日)	70年前、広島を壊滅させた原爆投下。巨大なきこの雲の下の惨状を記録した写真が世界でたった2枚だけ残っている。投下3時間後、爆心地から2キロのところにある「御幸橋」の上で撮影されたものだ。今年NHKは居合わせた被爆者の証言、最新の映像技術や最新科学をもとに、50人あまりが写る写真の真実に迫った。原爆特有のやけどを負っていた皮膚や今にも亡くなろうとしている人々…。そこはまさに「生と死の境界線」だった。
戦争とプロパガンダ～アメリカの映像戦略(7日)	米海兵隊が太平洋戦争の戦場で撮影した、約3000本、500時間のフィルム。当時制作されたプロパガンダ映画の素材材だ。米軍は「映像は兵器だ」として、戦意を高揚させる映像を大々的に流す一方、「不都合な映像」を検閲し排除していた。日米双方のプロパガンダで、憎しみはどのようにエスカレートしたのか。膨大なフィルムと極秘資料、そして元カメラマンらの証言から、戦争とプロパガンダが何をもたらすのかを明らかにする。
特攻～なぜ拡大したのか(8日)	爆弾を抱え航空機ごと空母などの標的に体当たり攻撃する「特攻」。昭和19年10月フィリピン戦で陸海軍が始めた特攻作戦は終戦まで加速度的に拡大する。魚雷を改造した水中特攻兵器やボートに爆弾を積んだ特攻舟艇など特攻専用の兵器も次々開発され4500人を超える戦死者を出した。その多くは20歳前後の若者だった。搭乗員の死を前提にした他に類を見ない作戦はなぜ拡大していったのか。軍の機密資料と証言をもとに探る。
“あの子”を訪ねて～長崎・山里小 被爆児童の70年(9日)	「ぼくの手はすっかり焼け、皮がなくなって、赤い肉が出ていた」「一面に血が流れていて、その中に、母のすっかり変わった顔がありました」。手記を残した37人をNHKでは継続的に取材してきた。今年再び彼らを訪ねると、見えてきたのは、70年たっても癒やされることのない原爆の傷跡だった。被爆したことを周囲に話せず、ひっそりと生きている男性。家族のひと言に深く傷ついている女性。被爆者の70年の人生に耳を傾ける。
戦後70年「一番電車が走った」(10日ドラマ)	昭和20年、広島では戦地に赴いた男性に代わり、少女たちが路面電車を運転していた。雨田豊子は16歳、電鉄会社の家政女学校で学びながら乗務していた。前年、軍需省から引き抜かれた電気課長の松浦明孝44歳は、上司と部下の間での板挟みに悩んでいた。8月6日、広島に原爆が投下。二人は生き残ったが、路面電車は壊滅状態に。会社は本土決戦の物資運搬に備え、復旧を訴えた。大惨事の中、心の葛藤を抱えながら、二人は…。
アニメドキュメント「あの日、僕らは戦場で～少年兵の告白～」(11日)	「目の前で幼なじみが撃たれ、倒れた。ぼくは彼を見捨てて戦闘を続けた。あの時、ぼくの心は異常だった…」(当時17才)沖縄北部のジャングルで米軍と戦った少年兵がいる。戦後70年経った今、30人余りの少年兵がこれまで秘められてきた事実を語り始めた。少年たちはなぜ戦場に送られたのか?証言と新たに発掘された資料から、子どもたちが戦争に利用されていった知られざる歴史を、“アニメドキュメント”で伝える。
女たちの太平洋戦争～従軍看護婦 激戦地の記録(13日)	使命感に燃えて戦地に向かった日赤の「従軍看護婦」。しかし、待ち受けていたのは、あまりに残酷な戦場の現実だった。献身的な看護のかいなく次々と亡くなっていく傷病兵。そして、戦況悪化の中、看護婦たちも生死の境をさ迷うまでに追いつめられる。派遣されて

	<p>帰国するまでを克明に記した業務報告書と、元看護婦の証言から、激戦地ビルマとフィリピンで、おびたしい数の死と向き合い続けた女性たちの戦争を描く。</p>
<p>カラーでみる太平洋戦争～3年8か月・日本人の記録（15日）</p>	<p>3年8か月にわたって続いた太平洋戦争。その間の映像は、戦場での記録映像や、銃後の暮らしを撮ったフィルムなど膨大にのこされているが、大半はモノクロである。戦後70年にあたりNHKでは、この「戦争の時代」を記録した映像を国内外から収集。徹底した時代考証を行い、最新のデジタル技術を駆使して、映像のカラー化に挑んだ。当時を生きた人々の日記や手記にある言葉を織り込みながら、フルカラーでたどる日本人の記録。</p>
<p>戦後70年 ニッポンの肖像 一戦後70年を越えて（15日）</p>	<p>シリーズ「戦後70年ニッポンの肖像」。終戦の日にお伝えする今回は、ポスト戦後70年に日本人は世界のために何ができるのか考えていきます。世界中で紛争がたえなかったこの70年、女優の石原さとみさんは、内戦が続くアフリカを訪ね戦争の実象を見つめます。寺島しのぶさんは、テロ事件の余波が続くフランスで、どうすれば対立を乗り越えられるか考えました。さらに各界で活躍するゲストを招き生放送で未来を展望します。</p>
<p>“終戦”知られざる7日間（16日）</p>	<p>8月15日の玉音放送で終結したとされる太平洋戦争。しかしその後も各地の部隊が徹底抗戦を唱え、特攻作戦の準備も行われるなど、本土決戦への意欲を高めていた。早期進駐を考えていたアメリカは、日本の部隊が戦闘をやめない事態を想定。武力で抑えることを計画していた。当時、日本は政府・軍中央の統制は弱まり、空白期間とも言える状況だった。こうした危機を乗り越える原動力の一つとなったのは、敗戦を冷静に受け止め、部下にどう行動すべきかを説いた前線の名も無き将校たちだった。玉音放送から戦闘停止に至るまでの“緊迫の7日間”を追い、戦後への礎になった人々の行動を見つめる。</p>

【2016】

<p>決断なき原爆投下 ～米大統領 71年目の真実（6日）</p>	<p>「原爆投下は戦争を早く終わらせ、数百万の米兵の命を救うため、2発が必要だとしてトルーマンが決断した」。アメリカでは原爆投下は、大統領が明確な意思のもとに決断した“意義ある作戦だった”という捉え方が今も一般的だ。その定説が今、歴史家たちによって見直されようとしている。（中略）今回、NHKでは投下作戦に加わった10人を超える元軍人の証言、原爆開発の指揮官・陸軍グローブズ將軍らの肉声を録音したテープを相次いで発見した。そして、証言を裏付けるため、軍の内部資料や、各地に散逸していた政権中枢の極秘文書を読み解いた。「トルーマン大統領は、実は何も決断していなかった…」アメリカを代表する歴史家の多くがいま口を揃えて声にし始めた新事実。71年目の夏、その検証と共に独自取材によって21万人の命を奪い去った原爆投下の知られざる真実に迫る（※EPGデータではなく番組HPより転記）。</p>
<p>象徴天皇 模索の歲月（8日）</p>	<p>きょう、ビデオメッセージの形で、国民に向けてご自身のお気持ちを表された天皇陛下。おことばは、天皇の位を皇太子さまに譲る“生前退位”の意向がにじむものだった。日本国憲法で「日本国民統合の象徴」と定められ、歴史上初めて“象徴天皇”として即位された天皇陛下が、なぜ“象徴天皇”の位を退く意向を示されたのか。NHKの独自取材から、天皇陛下の考えられる「象徴のあるべき姿」をめぐる、皇居のなかで緊迫したやりとりが行われていたことが明らかになってきた。天皇陛下のおことばの背景には何があるのか。そ</p>

	して、私たちはおことばをどう受け止めればよいのか。 <u>天皇陛下の“模索の歲月”を振り返りながら、考えていく。</u>
ある文民警察官の死～カンボジア PKO 23年目の告白(13日)	23年前、日本の自衛隊が初めて参加したカンボジア PKO。その時、75人の警察官も文民として派遣された。しかし、任務のさなかに武装勢力に銃撃され1人が死亡、4人が重傷を負った。停戦が合意され、戦闘が停止していたはずのカンボジアで何が起きていたのか。今回、これまで決して語ることのなかった隊員たちが初めて現地の実態を証言した。 <u>未公開の映像とともにカンボジア PKO の現実を見つめる。</u>
村人は満州へ送られた～“国策”71年目の真実(14日)	昭和20年8月、旧満州(中国東北部)で、ソ連軍の侵攻などによりおよそ8万人以上が犠牲となり、その後、中国残留孤児など数々の悲劇を生んだ“満蒙開拓”。植民地の治安安定や軍への食糧供給を目的に、27万の人々が満州に送り込まれたこの移民政策の詳細は、これまで知られてこなかった。村人を送り出した、ある村の村長の日記や破棄されたはずの極秘文書から、人々がどのように送り出されたのか、その真相を明らかにする。
ふたりの贖罪～日本とアメリカ・憎しみを越えて(15日)	「トラトラトラ」を打電した真珠湾攻撃総隊長、淵田美津雄は、戦後キリスト教徒となり、かつての敵国アメリカに渡り、 <u>伝道の旅を続けた</u> 。アメリカ陸軍のジェイコブ・ディシエイザー。真珠湾への復しゅうに燃え、日本本土への初空襲を志願、名古屋に数百発の爆弾を投下した。彼もまた戦後宣教師となり自分が命を奪った名古屋を拠点に伝道を続けた。 <u>ふたりの物語は、憎しみの連鎖に覆われた今の世界に確かなメッセージを与えてくれる。</u>
沖縄 空白の1年～“基地の島”はこうして生まれた(20日)	なぜ沖縄に基地が集中しているのか。それはどう始まったのか。NHKは、戦後の混乱のため資料が乏しく、「空白の1年」とも呼ばれる1945年から1946年の映像や未公開資料を入手。そこからは、アメリカが日本への返還や住民による自治を模索したにも関わらず、世界情勢の変化によって、沖縄が基地化されていく過程が浮かび上がってきた。本土が復興に向かう一方で、重い負担を背負うことになった沖縄の戦後をみつめる。

## 【2017】

原爆死～ヒロシマ 72年目の真実(6日)	世界最大級の“戦災ビッグデータ”がある。昭和20年8月6日から今日に至るまで、広島市が蓄積してきた55万人に及ぶ被爆者たちの記録「原爆被爆者動態調査」。 <u>NHKは今回、この元データを初めて市から入手、最新のビッグデータ解析技術を駆使し、時系列に並べて地図に落とし込んだ</u> 。人々は最悪の兵器によってどのようにして亡くなっていったのか。原爆投下から72年、知られざる被爆の新事実に向かう。
本土空襲 全記録(12日)	太平洋戦争中、戦闘機に装備され、機銃を撃つと自動的に作動する「ガンカメラ」の映像がいま相次いで発掘されている。米国でB29による新たな空襲映像も見つかった。日本本土への空襲。その規模の甚大さゆえに捉えきれなかった本土空襲の“全貌”が、ようやく見えてきた。膨大な新資料に分析を加え、データ・推移を地図にして可視化することで、大規模な戦略爆撃作戦の知られざる全体像に向かう。
731部隊の真実～エリート医学者と人体実験(13日)	戦時中、旧満州で密かに細菌兵器を開発し実戦で使用した、731部隊。 <u>NHKが発掘した、旧ソ連・ハバロフスク裁判の音声記録では、部隊幹部らが、日本に反発した中国や旧ソ連の人々を「死刑囚」とし、実験材料としていた実態を克明に語っていた</u> 。こうした実験を

	主導していたのが、大学等から集められた研究者達だった。エリート医学者はどのようにして集められ、なぜ人間を実験材料にしたのか。音声記録と数百点の資料から迫る。
樺太地上戦 終戦後 7 日間の悲劇 (14 日)	北海道の北に広がるサハリン。かつて「樺太」と呼ばれ、40 万人の日本人が暮らしていた。昭和 20 年 8 月、終戦後にも関わらず、住民を巻き込んだ地上戦が 1 週間にわたって続き、5000 人とも 6000 人とも言われる人たちが命を落とした。なぜ終戦後も戦闘は終わらず住民の被害が拡大したのか。長年沈黙を守ってきた元住民たちの証言、そして国内外で発掘した資料から、樺太の悲劇に迫る。
戦慄の記録 インパール (15 日)	川幅 600 メートルにも及ぶ大河と 2000 メートル級の山々が連なるインドとミャンマーの国境地帯。今から 73 年前、日本軍はこの国境地帯を越えインドにあったイギリス軍の拠点「インパール」の攻略を目指した。しかし、誰一人としてその地を踏むことが出来ず 3 万とも言われる将兵が命を落とした。歴史的敗北を喫した戦場で何があったのか。新資料と新証言でその全貌に迫る。
戦後ゼロ年 東京ブラックホール 1945-1946 (20 日)	戦後ゼロ年 (1945 年 8 月 15 日からの 1 年間)。それは東京、今の日本の原点が形作られた歴史の転換点だ。NHK は「戦後ゼロ年」に関する、貴重な「未公開映像」や機密資料を発掘。ヒト、モノ、カネをブラックホールのように飲み込み、都市が生まれていく秘史が見えてきた。「闇市」「東京租界」など歴史映像の中に、俳優・山田孝之さんが最新のデジタル技術でタイムスリップ！東京の出发点を知る新感覚ドキュメンタリー。

【2018】

夕風 (なぎ) の街 桜の国 2018 (6 日ドラマ)	「この世界の片隅に」で知られる漫画家・こうの史代のベストセラーをドラマ化／原爆に人生を翻弄されながらも、ひたむきに生きる女性、そして現代に生きる一人の女性／60 年のときを経て、二人をつなぐ糸とは？／原爆とは、家族とは？／静かに胸にせまる感動の物語／主演：常盤貴子・出演：川栄李奈、橋爪功／核と平和に向き合ってきた NHK 広島放送局が開局 90 年の節目におくる特集ドラマ／この夏、何かを感じたいあなたへ！！
広島 残された問い～被爆二世たちの戦後 (6 日)	原爆放射線は人の体において次世代にも健康影響をもたらすのか。この問題をめぐって被爆二世たちが葛藤している。脳裏をよぎり続けるという健康不安、これまでに受けてきた偏見や差別。去年、一部の被爆二世たちは、国に援護を求めて提訴した。一方、広島の研究機関では、DNA の細部にまで及ぶ解析によってこの難問に挑む格闘が続いている。広島で 70 年余りにわたり追究が続く「残された問い」と向き合う人々を見つめる。
祖父が見た戦場～ルソン島の戦い 20 万人の最期 (11 日)	あなたは、自分のおじいさんのこと知っていますか？私、小野文恵の祖父はフィリピン・ルソン島で戦死しました。しかし、いつ、どこでどのように亡くなったのか、分かっていません。同じ部隊の生還兵が持ち帰った部隊の日記を手がかりに、祖父の足跡をたどってみることにしました。その旅で見えてきたのは、20 万人が命を落としたルソン島の絶望の戦場と戦争のむごさでした。果たして、祖父の死の謎は解けるのでしょうか。
“駅の子”の闘い～語り始めた戦争孤児 (12 日)	NHK では、この 3 年間、路上生活を経験した孤児への聞き取りや、資料発掘を進めてきた。子どもたちが餓死していく日常、生きるために盗みや売春をせざるをえない子どももいた。孤児たちが訴えるのが、国や大人たちから「見捨てられた」という思いだ。「汚い」

	とさげすまれ、やさしい言葉をかけてくれる大人はいなかった。「戦争が終わってから本当の闘いが始まった」という孤児たち。知られざる「駅の子」の実像に迫る。
船乗りたちの戦争～海に消えた6万人の命～(13日)	太平洋戦争で、民間の船乗りが6万人も犠牲になっているのを知っていますか？軍の命令で、最前線に武器や兵士を運んでいたのは、民間の客船や貨物船でした。十分な護衛もなく、アメリカ軍の潜水艦に沈められていきました。南方の激戦地では、島に敵前上陸した船員が餓死。また、多くの漁師が敵を海上で監視する任務にかり出され、命を落としていました。番組では、奇跡的に生還した人々を訪ね、船乗りの知られざる悲劇に迫ります。
ノモンハン 責任なき戦い(15日)	79年前、モンゴルの大草原で日本とソ連が戦ったノモンハン事件。ソ連の近代兵器を前に、日本は2万人の死傷者を出し敗北した。司馬遼太郎が「日本人であることが嫌になった」と作品化を断念したこの戦いで、何があったのか。新たに発掘した150時間の陸軍幹部の肉声テープには、曖昧な意思決定で紛争が拡大し、責任を現場へ押しつけ自決を強要していった実態が証言されていた。AIでカラー化した、鮮明な戦場の映像で伝える。
届かなかった手紙時をこえた郵便配達(19日)	太平洋戦争中、戦場の兵士と故郷の人々を結んだ「軍事郵便」は、年間4億通に達した。しかし戦況の悪化によって、宛先に届かない手紙が増えていった。今、そうした未配達の手紙が次々と見つかっている。死と向き合う中で紡ぎ出された、家族らへの愛情にみちた言葉。番組では、宛先の家族を探し、70年余りの時を経て初めて手紙を届ける。手紙に秘められた様々なドラマから、知られざる戦争の一断面を描く。朗読は俳優の高良健吾。

## 【2019】

●戦没者は二度死ぬ～遺骨と戦争～(5日)	「戦没者は二度死ぬ」という。一度目は戦争で死んだとき、二度目は遺骨の調査を蔑ろにし、祖国に帰らせられなかったとき。国は2024年までに戦没者の遺骨収集を集中的に進めるとしている。しかしシベリアでは日本人ではない疑いがある骨が持ち帰られ、その実態が公表されていなかった問題や、現場で遺骨が焼かれ遺族の元に戻らないなどの実態も明らかに。遺族の願いが踏みにじられていた。遺骨収集の現実と遺族の思いを追った。
“ヒロシマの声”がきこえますか～生まれ変わった原爆資料館～(6日)	今年4月、広島原爆資料館が、戦後最大のリニューアルを行った。遺品や資料に「持ち主のエピソード」や、「残された家族の思い」を記して展示。被爆者が高齢化する中、遺品や資料に、被爆者の思いを語ってもらおうとしている。番組では、遺品に秘められた物語を取材。野球選手にあこがれた少年の半袖シャツが語る「あの日の惨状」。息子の革ベルトに込められた「母の悲しみ」をたどることで、被爆者のメッセージに迫っていく。
マンゴーの樹の下で「～ルソン島、戦火の約束～」(8日ドラマ)	長年小さな写真館を凜子(岸恵子)と綾(渡辺美佐子)は営んできたが綾が亡くなり、不動産社員・門井(林遣都)に従い、凜子は売却を決意。密かな恋心を凜子に持つ田宮(伊東四朗)は嘆き悲しむ。そこに一通の手紙が届く。昭和20年のマニラ空襲で亡くなったはずの、綾の弟からの手紙だった。フィリピン時代の事を何も語らない凜子。昭和20年ルソン島の日々、凜子(清原果耶)と綾(山口まゆ)二人だけの秘密があったのだ！
激闘ガダルカナル悲劇の指揮官(11日)	「地獄の戦場」ガダルカナル。陸軍精鋭部隊916名が1万を超える米軍に戦いを挑み、全滅した。指揮官の一本清直大佐は、無謀な作戦で、部下の命を奪ったとして非難を浴びてきた。果たしてそれは真実なのか？新発見の戦闘記録から、知られざる激戦をCGとドラ

	マで復元。十倍の敵がいるとは知らず、死の罠に追い込まれた兵士たち。予期せぬ大敗北の裏には、陸海軍の熾烈な対立があった。部隊全滅の責任を負った指揮官の悲劇に迫る。
かくて“自由”は死せり～ある新聞と戦争への道（12日）	戦前最大の右派メディアが見つかった。時の司法大臣・小川平吉が、1925年に創刊した「日本新聞」である。新聞が発行されていた11年間は、日本が「大正デモクラシー」から急速に「軍国主義」に傾斜していった時代だった。なぜ日本人は、一度は手にしていたはずの「自由」を手放し、「戦争への道」を進んだのか。「日本新聞」を手がかりに、見つけていく。
全貌 二・二六事件～最高機密文書で迫る（15日）	私たちが知る歴史は、一断面に過ぎなかった。NHKは「2・26事件」の一部始終を記した「最高機密文書」を発掘した。1936年2月、重要閣僚らが襲撃された近代日本最大の軍事クーデター。最高機密文書には、天皇の知られざる発言や、青年将校らと鎮圧軍の未知の会談、内戦直前だった陸海軍の動きの詳細など、驚くべき新事実の数々が記されていた。事件後、軍国主義を強め戦争に突入した日本。事件の「衝撃の全貌」に迫る。
戦争と“幻のオリンピック” アスリート知られざる闘い（18日）	1940年に東京で開かれるはずだったオリンピックが中止となり、幻となった。活躍を期待された選手たちは、国にスポーツを奪われ、戦場で命を落としていった。そうした中、スポーツの精神を守ろうと立ち上がった人物がいた。日本の競泳界を世界最強にまで育てた元代表監督の松澤一鶴だ。戦争に翻弄された選手たちと、スポーツを取り戻そうと闘った松澤の知られざる物語を、北島康介、長谷部誠、朝原宣治とともにたどっていく。

【2020】

沖縄 “出口なき”戦場～最後の1か月で何が（2日）	住民12万人が命を落とした沖縄戦。1945年5月末、日本軍の総司令部があった首里が陥落、事実上の勝敗が決した後も関わらず、戦闘は継続。少なくとも住民4万6千人が命を落とした。なぜ、これほど多くの住民が犠牲になったのか。今回NHKは、アメリカ軍の新資料を発掘、苛烈な攻撃に住民が巻き込まれていった詳細が浮かび上がってきた。終わることなく続いた戦場で何が起きていたのか。多くの命が失われた1か月に迫る。
証言と映像でつづる原爆投下・全記録（6日）	戦後75年にあたる今年、私たちは、アメリカの原爆の開発計画の現場責任者の手記を発見。さらに、原爆を投下した爆撃機のパイロットや、当時の日本の指導者へのインタビューも入手した。そこからはアメリカが自らの「正義」のために、投下を決定した過程や、日本が降伏を決断できないまま、あの日を迎えてしまった経緯が浮かび上がってきた。これらの資料に、NHKが取材した膨大なアーカイブスを加え原爆投下の全体像に迫った。
渡辺恒雄 戦争と政治～戦後日本の自画像（9日）	70年にわたり戦後政治の表と裏を目の当たりにしてきた読売新聞グループのトップ・渡辺恒雄氏、94歳。今回、映像メディアによる初めてのロングインタビューが実現した。証言から浮かび上がるのは、歴代首相の“戦争体験”が、戦後日本に与えた影響である。戦争の記憶が薄れゆく戦後75年目の日本。戦後日本が戦争とどのような距離感の中で形作られ、現在に何をもたらしているのか。渡辺氏の独占告白から立体的にひも解く。
太陽の子（15日ドラマ）	第二次世界大戦末期、京都大学の物理学研究室に海軍から下された密命は、核分裂のエネルギーを使った新型爆弾を作ること。核エネルギーの研究を進める一方で、科学者として兵器開発を進めていくことに苦悩する研究者たちの姿を描く。柳楽優弥、有村架純、三浦

	春馬ら、人気俳優が戦争に翻弄された若者たちを演じる。国際共同制作で作られた映画「太陽の子」とは違う視点で描く、もう一つのドラマ。BS8K、BS4K 同時放送。
忘れられた戦後補償 (15日)	国家総動員体制で遂行された日本の戦争。310万の日本人が命を落としたが、そのうち80万は様々な形で戦争への協力を求められた民間人だった。 <u>しかし、これまで国は民間被害者への補償を避け続けてきた。</u> 一方、戦前、軍事同盟を結んでいたドイツやイタリアは、軍人と民間人を区別することなく補償の対象とする政策を選択してきた。国家が遂行した戦争の責任とは何なのか。 <u>膨大な資料と当事者の証言から検証する。</u>
アウシュビッツ 死者たちの告白 (16日)	第二次世界大戦中、ユダヤ人の大量虐殺が行われたアウシュビッツ強制収容所。 <u>ガス室跡の地中から“謎のメモ”が見つかった。最新技術で解読したところ、書いたのは同胞をガス室へ誘導する役割や死体処理などを担ったユダヤ人特殊部隊「ゾンダーコマンド」のメンバーだったことがわかった。</u> 人類史上類を見ない大量虐殺の陰で“裏切り者”と呼ばれた男たち。密室の中で何が行われていたのか。75年の時を超え、よみがえる真実に迫る

## 【2021】

原爆初動調査 隠された真実 (9日)	今から76年前。広島と長崎では、アメリカ軍によって「原爆の被害と効果」に関する大規模な調査が行われた。調査では、被爆地に残る放射線・残留放射線が計測され、科学者たちは「人体への影響」の可能性を指摘していた。 <u>しかし、その事実は隠蔽されることになった。</u> 今も、広島や長崎の人々は、残留放射線の影響で苦しんでいると訴えている。 <u>なぜ真実は隠されたのか。その過程をたどり、「原爆初動調査」の全貌に迫っていく。</u>
しかたなかったと言うてはいかんのです (13日ドラマ)	岡田武松は、現在の気象庁の前身・中央気象台のトップとして日本の気象事業の礎を築いた。「台風」という呼び名を付け、日本に梅雨が現れる原因を解明し、はたまた日露戦争時には、日本海海戦の気象予報を担当、見事的中させた。そんな武松は、日中戦争が始まると、軍事作戦のために気象情報を独占したい陸軍から協力要請を受ける。非常時にあって、天気予報は軍のものか、それとも国民のためのものか?武松が取った行動とは?
銃後の女性たち～戦争にのめり込んだ“普通の人々” (14日)	かっぱう着にたすき掛け。戦時中のドラマでたびたび登場する「国防婦人会」の女性たち。 <u>新たに発見された資料や取材から、戦争を支えた女性たちの意外な「思い」が明らかになった。</u> 女性の活躍の場が少なかった時代、国防婦人会への参加は「社会参加」の機会だった。「社会の役に立ちたい」と懸命に生きた女性たちがなぜ自身を抑圧するようになったのか。戦争に協力していった女性たちの、これまで語られてこなかった心の内に迫る。
開戦 太平洋戦争～日中米英 知られざる攻防～ (15日)	中国国民政府を率いた蒋介石の膨大な日記の全貌が明らかになった。 <u>近年公開された蒋の外交史料と合わせて浮かび上がるのは日中戦争の国際化をもくろんだ戦略である。</u> そしてアメリカ・イギリスの思惑も交錯しながら太平洋戦争開戦へとつながっていたのである。一方で、日本は多くの選択肢がありながら「引き返し可能地点」を何度も失っていたことも明らかになった。太平洋戦争開戦秘録から浮かび上がる現代への教訓とは。

## 【2022】

原爆が奪った“未来”～中学生8千人・生と	77年前、広島に投下された原子爆弾。軍の主導で、空襲の延焼を防ぐための作業に動員されていた中学生8000人が大きな被害を受けた。 <u>今回、NHKは、学校などに保管さ</u>
----------------------	--

<p>死の記録～（6日）</p>	<p><u>れていた膨大な資料を入手。そこから6000人も命が奪われていった実態が明らかになった。子どもたちの“命の記録”から、核兵器がもたらす脅威と、守るべき尊い未来を奪っていく戦争の現実</u>に迫る。</p>
<p>戦火の放送局～ウクライナ 記者たちの闘い～（7日）</p>	<p>母国が戦場となったときジャーナリストたちは「戦争」をどう伝えるのか…。鳴り響く防空警報の下、臨時拠点からの放送・配信を続けるウクライナ公共放送。ロシア軍の侵攻から5か月あまり、長期取材から見えてきたのは、ロシア側が仕掛けるプロパガンダの実態や、ウクライナ政府から課される戒厳令下の報道規制、そして家族や友人たちの命が危険にさらされる中で、何をどう報じていくのか苦悩する職員たちの姿だった。</p>
<p>そして、学徒は戦場へ（8日）</p>	<p>10万人が徴兵されたとも言われる学徒出陣。「国家の存亡のために欠くことができない存在」だと位置づけられていた学問や学徒が、徴兵猶予という“特権”を「停止すべきだ」と、批判される存在へと変貌していった。その過程でいったい何が起きていたのか。<u>当時の国や大学の関係者、学徒など、およそ100人に及ぶ関係者の取材を通して、その真相に迫り、今につながる教訓は何かを考えていく。</u></p>
<p>混迷の世紀「第1回 ロシア発 エネルギーショック」（9日）</p>	<p><u>密着ドキュメント・エネルギーショックの舞台裏▽「日本にガスを！」電力ひっ迫の裏で進むLNG争奪戦・交渉の最前線をカメラが記録▽プーチン大統領に揺さぶられる世界電気代値上がりはいつまで続く？LNG調達に“プーチンの戦争”の影響「下がる要因がない」と語るトレーダー▽サハリン2に新たな動き・そのとき国は？▽プーチン大統領を支えた元首相が証言「プーチンは地政学のカードとして利用」▽ロシア産原油は中国やインドに…タンカー分析で見たロシアの戦略▽一気に加速か？水素エネルギー・日欧の競争の最前線▽ダニエル・ヤーギン氏が語る「戦争の2つ目の戦線が開かれた」</u></p>
<p>アイドル（11日ドラマ）</p>	<p>戦時下の元祖アイドル・明日待子（古川琴音）の青春の日々を描く。出演は山口正太郎（山崎育三郎）高輪芳子（愛希れいか）須貝富安（正門良規）佐々木千里（椎名桔平）ほか昭和初期、上京した明日待子（古川琴音）は、佐々木千里（椎名桔平）の目に留まり、ムーンラン・ルーージュ新宿座の座員となる。先輩の高輪芳子（愛希れいか）に憧れ、看板俳優の山口正太郎（山崎育三郎）や同僚の小柳ナナ子（田村芽実）らと稽古に励む中、ある日突然、舞台のセンターに立つことに。やがて絶大な人気を誇り、トップアイドルとなった待子。須貝富安（正門良規）への恋も芽生えた矢先、戦争が待子の人生を変えていく…。</p>
<p>新・ドキュメント太平洋戦争1942大日本帝国の分岐点（前編）（13日）</p>	<p><u>市民や国の指導者、兵士が記した日記や手記などのエゴドキュメントをもとに、個人の視点から太平洋戦争を追体験するシリーズ。</u>今回は1942年、大日本帝国の分岐点に迫る80年前の1942年、明から暗へと一変した「大日本帝国」の分岐点を見つめる。真珠湾攻撃の後、連戦連勝を重ね、アジアで占領地を拡大していった日本。市民の日記には、明るい気分が満ち、愛国心の高まりがみられた。しかし4月、アメリカ軍から予期せぬ本土空襲を受けると、軍部に動揺が走り、戦争の行く末を左右するミッドウェー海戦につながっていく。大敗北を喫した軍は、真相を隠し、メディアも偽りの戦果を伝えていく。</p>
<p>新・ドキュメント太平洋戦争1942大日</p>	<p><u>戦時下に個人が記した日記や手記などをもとに、個人の視点から戦争を追体験するシリーズ。</u>1942年は、戦局が大きく転換し、さまざまな戦争の矛盾が噴き出す様を見つめる</p>

本帝国の分岐点（後編）（14日）	戦時下に個人が記した日記や手記などの「エゴドキュメント」をもとに、日本の繰り広げた戦争を個人の視点から1年ごとに追体験するシリーズ。1942年は「大日本帝国の分岐点」をみつめる。開戦以来勝利を重ねてきた日本。6月のミッドウェー海戦で敗北。戦況が悪化する中、東南アジアの占領地でも日本の支配が揺らいでいく。そして、ガダルカナルの戦い。最新の技術を使い、兵士たちの言葉から、「戦場の現実」を伝える。
ビルマ 絶望の戦場（15日）	太平洋戦争で“最も無謀”といわれたインパール作戦。実は、その後の「撤退戦」で、それを上回る命が失われていた。戦局がほぼ決したビルマで何が起きていたのか。1944年7月、太平洋戦争で“最も無謀”といわれたインパール作戦は3万もの戦死者を出し、惨憺たる結果に終わった。しかし、その後、終戦までの1年間で、それを上回る将兵の命が失われていた事実はほとんど伝えられてこなかった。今回、国内外で入手した一次資料や証言からその実態が浮かび上がった。太平洋戦争の形勢がほぼ決した中で、失われ続けた命。証言と新資料から明らかになった“絶望の戦場”の実態とは。
ウクライナ侵攻半年～“ブーチンの戦争” 出口はどこに～（20日）	ロシアによるウクライナへの軍事侵攻から半年。今も終わりの見えない戦闘が続いている。果たして、この「戦争」が、どれほどの犠牲や破壊をもたらしたのか？「公開情報」や専門家の分析などから、その実態に迫る。さらに、戦火にさらされ続ける市民のいまに密着。国際社会の中でも“徹底抗戦派”と“対話重視派”の間で議論が起きている現状などに迫りながら、「戦争」の出口はどこにあるのか、スタジオで専門家と共に考える。

## 【2023】

いのち眠る海 ～最新調査で明かす太平洋戦争～（5日）	太平洋戦争中、海で失われた35万の命。最新技術で「海の死」の実相に迫る調査が進んでいる。マリアナ沖海戦で沈んだ航空機。海底に眠る残骸を分析すると、過酷な作戦の末に海に沈んだパイロットの最期が浮かび上がった。一方「海の墓場」とも呼ばれる旧トラック島では国の遺骨調査が始まった。NHK独自の調査で、助けを求めながら船とともに沈んだ兵士たちの姿も見えてきた。戦後78年、海底調査で明かす「戦争の真実」。
原子爆弾・秘録 ～謎の商人とウラン争奪戦～（6日）	78年前、広島・長崎に投下された原子爆弾。その開発に重要な役割を果たした“謎の商人”がいる。原爆の原料となるウランをアフリカから密（ひそ）かにアメリカに運び込んだ人物。今回、彼が残した3万ページに及ぶ未公開資料が見つかった。そこには会社の利益のために奔走した男が、はからずも世界を大きく変えてしまう様子が記されていた。今につながる核の時代はどのようにして始まったのか、原爆開発の知られざる真実に迫る。
発見 昭和天皇御進講メモ～戦時下 知られざる外交戦～（7日）	昭和天皇と戦争との関わりを示す新資料が発見された。昭和天皇に国際情勢を進講し続けた宮内省御用掛・松田道一の膨大なメモである。外務省に集まる国際情報を12年間509回も進講。太平洋戦争の開戦、終戦をめぐる天皇の決断に影響を与えた。中でも注目されるのが、パチカンなどの中立国を重視した和平工作である。番組では御進講メモをAIで分析、第一線の研究者が読み解き、世界戦争の中の知られざる外交戦を見つめていく。
軍港の子～よこすか クリーニング 1946～（8日ドラマ）	戦後の神奈川県横須賀。誰も助けてくれない戦争孤児たちは靴磨きやたばこ拾い、時に犯罪に手を染めていた。しかし、あるきっかけで「クリーニング」の仕事に出会う。犯罪ではなく人に感謝されてお金を稼ぐ。その生活の中で、孤児たちは笑顔を取り戻し始める。

	自分たちの稼ぎで「家を借りて暮らす」というささやかな夢を抱くようになった子供たちだったが、さらに過酷な現実に襲われることになり…
新・ドキュメント太平洋戦争 1943 国家総力戦の真実 前編 (13日)	戦争の時代を生きた人々の日記や手記「エゴドキュメント」から、1年ごとに歴史を追体験するシリーズ。戦死者が増加する中、若者や子供が戦力として国家総力戦の渦に巻き込まれていく1943年を描く。戦場では将兵たちが「愛する妻よ、さようなら」と遺書を残しアメリカ軍に突撃していく。部隊の全滅が「玉砕」と美化される中、市民は「祖国重大な時」「あとに続け」と戦争協力を強め、十代の若者たちが兵士へと志願していく。
新・ドキュメント太平洋戦争 1943 国家総力戦の真実 後編 (14日)	80年前の1943年、敗北を重ね、戦力を消耗していった日本。際限なき戦争動員が市民の暮らしを一変させ、戦火から遠かった若者や子どもが巻き込まれていく。海軍は、パイロット養成機関である予科練の募集を強化。中学生ら3万人が名乗りをあげた。ノルマに応じて、志願を呼びかけた学校。教師や親は、苦渋の決断を迫られる。秋には、学徒出陣が決まり、大学生も学業半ばで戦場へ向かう。その先には、過酷な運命が待っていた。
アナウンサーたちの戦争 (14日)	太平洋戦争から80年。日本軍の戦いをもう一つの戦いが支えていた。ラジオ放送による「電波戦」。ナチスのプロパガンダ戦に倣い「声の力」で戦意高揚・国威発揚を図り、偽情報で敵を混乱させた。行ったのは日本放送協会とそのアナウンサーたち。戦時中の彼らの活動を、事実を元にドラマ化して、放送と戦争の知られざる関わりを描く。
Z世代と“戦争” (15日)	戦後78年となる終戦の日。Z世代の若者たちが “戦争” をテーマに本音で議論。参加するのは高校生・大学生・ドキュメンタリー作家・元自衛官など多彩なメンバー。Z世代3千人へのアンケートでは「10年以内に日本が戦争に巻き込まれる可能性は」という質問に、半数以上が「ある」「どちらかと言えばある」と回答。戦争を起こさないために何ができるか？ Nスペが記録してきた過去の戦争も題材に、専門家やゲストと考える。

【2024】

原爆 いのちの塔 (6日)	原爆投下により壊滅的な被害を受けた広島。その中で、被爆直後から医療活動を始め、負傷者が殺到したのが広島赤十字病院だ。NHKは、「いのちの塔」とも呼ばれた病院で、医療活動の指揮をとり続けた院長・竹内釦が残した手帳を入手した。番組では、竹内資料などをもとに、被爆直後の医療現場の最前線を追体験していく。人類が初めて直面した核兵器の脅威、それに対峙した医療従事者たちの視点から、被爆の実相に迫る。
新・ドキュメント太平洋戦争 1944 絶望の空の下で (15日)	太平洋戦争の3年8か月を、当時の日記や手記から追体験するシリーズ。第4回は市民の犠牲が急増した1944年。1万の住民が犠牲となったサイパン島の戦いを、 <u>14歳の少女の手記</u> からたどる。この年、本土空襲が本格化、戦火が市民に及ぶ。追い詰められた日本は、人間を兵器にする「特攻」に踏み出す。その犠牲となった若者たちは、みずみずしい感性で、思いを書き残していた。市民の生活はいかに戦争に侵食されていったのか。
昔はおれと同年だった田中さんとの友情 (15日ドラマ)	椰月美智子作の児童文学「昔はおれと同年だった田中さんとの友情」のドラマ化。小学校6年生のスケボー好きの男の子、拓人が神社の管理人をしているおじいさん、田中さんと出会う。田中さんは70年、神社の敷地内で一人ぼっちで暮らしてきた。拓人は田中さんと交流を深めていく中で、田中さんの戦時中の体験を聞く。拓人は田中さんのことをみ

	んなに知ってもらいたいと思い、田中さんの講演会を開くことを提案する。
グランパの戦争～従軍写真家が遺した1千枚～(16日)	オランダに暮らす写真家のマリアンは、家族の“忌まわしい”過去を発見した。マリアンの祖父、ブルース・エルカスが撮影した太平洋戦争の写真だ。激戦地・硫黄島に並べられたアメリカ兵の遺体や頭髮が残ったままさらされた日本兵の頭蓋骨。さらに、占領下にあった進駐兵向け「慰安施設」の内部とみられる、極めて珍しい写真も含まれていた。残された1000枚の写真は、79年の時を超え、私たちに何を問いかけているのか辿る。
“一億特攻”への道～隊員4000人生と死の記録～(17日)	番組では15年に及ぶ取材で特攻隊員約4000人の本籍地や経歴を徹底調査。隊員がどのように選別されたのか、これまで謎だったその実態に迫る極秘資料も入手した。浮かび上がってきたのは、当時の日本人が特攻を希望とみなし、国のすみずみまで熱狂が支配していく様だった。その背後には軍とメディアによるプロパガンダや、特攻を軍部内の力学に利用しようという思惑も…。隊員たちの心情も描きながら「一億特攻」の真相に迫る。
“最後の1人を殺すまで”～サイパン戦発掘・米軍録音記録～(18日)	日本からの移民が多かった“南洋の楽園”サイパン。アメリカ軍が太平洋戦争で初めて日本の民間人と対峙した戦場となった。発掘した音源から浮かび上がるのは、命を投げ捨てて突撃する日本兵と憎悪をかきたてるアメリカ兵の姿。軍民混在の中で住民を保護する方針が崩れていく様子だ。この戦いでアメリカ兵の日本人に対する見方は一変することになる。録音記録に元兵士の新たな証言を加え、80年前の戦場を立体的に浮かび上がらせる

## 【2025】

広島グラウンドゼロ爆心地500m生存者たちの“原爆”(6日)	原爆の炸裂で、史上最悪の“死のゾーン”となった爆心地＝グラウンドゼロ。広島で半径500m以内にしながら、 <u>奇跡的に生き延びた78人</u> がいた。あの日、彼らは何を体験したか、そして戦後をどう生きたか。彼らが語った110時間に及ぶ証言テープが残されていた。刻まれていたのは、78人しか語るできない爆心地の衝撃的な光景。最新科学で検証・映像化。そこから浮かび上がった核兵器がもたらした“ <u>極限の真実</u> ”とは一。
原子雲の下を生き抜いて長崎・被爆児童の80年(9日)	原爆によって児童約1500人のうち9割近くがなくなった長崎市・山里小学校。奇跡的に生き残った37人は、 <u>壮絶な被爆体験</u> を手記に書き、世界で初めて出版された。 <u>NHK</u> は、親や家族を失った児童のその後を記録してきた。「生き延びた後のほうが地獄だった」と語った人もいた。 <u>80～90代</u> になった37人は、いま何を思うのか。語り始めたのは80年間、誰にも言えなかった思い…。かつての被爆児童たちの“いま”を見つめる。
●戦争をどう伝えていくか(10日)	戦火の時代に戦争をどう伝えていくか。放送100年の節目、NHKが制作した戦争番組を振り返りながら考える。戦時中、ラジオは戦争熱をあおり、国民を動員するメディアとなった。当時の職員が語ったのは「 <u>深刻な反省</u> 」。戦後のテレビ時代には、ドキュメンタリーやドラマで、戦争の傷を伝えつづけた。そして今、原爆の記憶をバーチャルリアリティで残す試みも。俳優の尾野真千子さんがVRを体験。戦争を伝える意味を語る。
八月の声を運ぶ男(13日ドラマ)	その生涯をかけ千人を超える被爆者の「声」を録音し、未来へ遺した一人のジャーナリストがいた。長崎の放送局を退職した辻原保(本木雅弘)は、重い録音機材を携え日本全国を歩き歩いていた。活動を周囲から理解されない孤独の中、彼は一人の被爆者・九野和平(阿部サダヲ)と出会う。その感動的な被爆者体験は辻原の心を強く揺さぶり「声」を遺

	すことへの決意を新たにさせる。しかし、その「声」は謎に満ちたものだった…。
新・ドキュメント太平洋戦争 1945 終戦(15日)	太平洋戦争の3年8か月を、個人の日記や手記から追体験するシリーズ。1945年、空襲・沖縄戦・原爆で多くの民間人が直接攻撃にさらされていく。空襲でばらばらになった下町の大家族、沖縄の地上戦に巻き込まれた市民、そして広島を悲劇が襲う。さらに、フィリピンでも激しい戦闘が起こり、日本人と現地市民が巻き込まれた。人々は、何を記し、どう生きたのか。戦争の残酷さと苦悩が言葉に刻まれる。
新・ドキュメント太平洋戦争 最終回 忘れられた悲しみ(15日)	太平洋戦争の時代を、個人の日記や手記から追体験するシリーズ。最終回は、残された人たちが、終戦の日から人生を閉じる時まで書いた言葉をたどっていく。復興に注目が集まる広島で、原爆がもたらすむごさを記録し続けた被爆者。特攻で亡くなった夫の無念さは理解されていないと苦悩する妻。大切な家族や友人を亡くし、自分が生き残った意味を問い続けた人たち。戦争の傷跡が見えにくくなる中、彼らが書き残したかった思いとは。
シミュレーション昭和16年夏の敗戦前編・ドラマ×ドキュメント(16日)	猪瀬直樹のロングセラー「昭和16年夏の敗戦」を原案に加えたドラマと、総力戦研究所の史実を伝えるドキュメンタリーを2夜連続で放送。日米開戦前夜の1941年夏、首相直属の総力戦研究所で日本とアメリカが戦った場合のあらゆる可能性がシミュレートされた。官僚・軍人・民間から選抜された若きエリートたちが導き出した結論は日本の“圧倒的な敗北”だった。戦後80年の夏に送るこん身のNHKスペシャル。
シミュレーション昭和16年夏の敗戦後編・ドラマ×ドキュメント(17日)	猪瀬直樹のロングセラー「昭和16年夏の敗戦」を原案に加えたドラマと、総力戦研究所の史実を伝えるドキュメンタリーを2夜連続で放送。日米開戦前夜の1941年夏、首相直属の総力戦研究所で日本とアメリカが戦った場合のあらゆる可能性がシミュレートされた。官僚・軍人・民間から選抜された若きエリートたちが導き出した結論は日本の“圧倒的な敗北”だった。戦後80年の夏に送るこん身のNHKスペシャル。
“戦争を歌う”人気絶大ラッパー ZORN と Zebra (18日)	「戦後80年というけれど現代こそが戦火の時代。いまを生きる自分たちに何が出来るのか」日本を代表するラッパーのZORNとZebra。自分の置かれた境遇や心情をストレートに表現するリリックで絶大な支持を集める二人が今夏、“戦争”を歌う新たな曲作りに挑んだ。東京大空襲で孤児となり苛烈な戦後を生きた人や、ガザやウクライナなど戦火のただ中に生きるアーティストと向き合い、紡ぎ出された歌…舞台裏と葛藤の記録。
大阪激流伝 おもしろいこと おそろしいこと ぎょうさんおました(31日)	終戦前日、米軍の空襲で壊滅した東洋最大の軍需工場「大阪砲兵工しょう」。そこで働いていた人々が戦後の新しい大阪を作り上げていった。大砲を作った技術は、鍋釜・自転車・家電と平和な時代の産業に活かされていく。しかしふたたび、新たな戦争の影が…。涙あり笑いありの家族三代の物語を、オール関西出身の俳優陣のドラマとドキュメンタリーで描く。出演は堤真一、麻生祐未、波岡一喜、伊東蒼、谷村美月ほか。語りは古田新太